に照る並木松の間を、一劔飄然身輕く歩み行くなりき『お兄樣御機嫌克う』『無事の消息を相待ち居るぞ』と口々に呼ぶ聲も遠く、人々が哀別の間を分けて西吹く風は颯々と鳴る、松陰は暫くして、

『重輔が來て居たやうぢや』

『一目にても御名殘が惜みたいと申し、彼へ參つて居りました』

『まだ志があると見もる』

『いかにも不憫な者、先生お留守の間に、一人前の男にしてお目に懸けます』

『爾うなれば自他の幸ひぢや、然し彼武士として世に立つには、いかにしても情に脆い』

『夫れを療治して見る心でございます』

『まだ婦人の愛に附纏はれて居るであらう』と松陰は重輔の身を深くも案じて『彼の身を玉にするには、その曇りから除らねばならぬ』

『いつそ表向き夫婦にしてはどうでございませうな』

『重量が過ぐれば必ず沈む、國家の爲に身を捨てんとするもの、求めて累ひを作つて何うするとても世に長ふべくもあらぬ身の假の契りをいかで結ばん、この氣慨が無くてはならぬ』

『眞に』と義助は松陰の心を察して『石で終るか、玉と作るか、私の丹精重輔の覺悟、來春御歸國の折までに、何れともお目に懸けるでございます』

『不在中は敏三郎の事を賴む、お千代の事を賴む、別しては御病氣勝ちで在らせられる母樣の事を賴む』

その日松陰は豫定の如く赤馬關の宿屋に着きて一泊しぬ、義助はそこより暇を告げて萩の城下へ歸りたりき。

（五十七）

松陰はこれが初旅なりき、目に觸るゝ物、耳に聞く物一つとして珍らしからぬはなかりき、海の色、故國の潮に渝る處なけれど、滔々と岸を打つ響きは、何となく胸の底に響く如く感じき、名を知らぬ山々の樹の蔭、故國の翠に違ふ處なけれど、雨を含み風に撼く樣何となく心の色に添ふ如く見えき、彼れは百里の道を唯一人

行く、雨の日は淋しく父母のことを思ひ出しき、風の夕は驚き易く同胞の情を夢みき、彼れが志す平戸の城下へ着きたるはその年九月上旬なりき。

平戸へ着くと共に、まづ山鹿萬助の屋敷を訪ひぬ、萬助は當藩兵學の指南役なれば、屋敷も廣く門人も多く、玄關の執次極めて應揚なり、松陰は玄關に案内を乞ふ立ち出でたるは門人らしき若侍なり。

『私、長州萩の家中、吉田寅次郎と申す者でござる、先生御意得たく、態々參上、お執次ぎ好きに願ひ存ずる』

彼は謹んで來意を告げぬ、執次の役人は聞きて、

『遠路の處、近頃お氣の毒に存ずるが、先生は御病氣ぢや、重ねて來らせられ』

病氣とありては是非もなき事、一たん旅宿へ引き取らんかと思ひしが、此儘にては心往かじ、執次に頼み置きては、志の通せぬ恐れあるべし、書面に認めて書き殘し置かんと、咄嗟の中に思ひ附きたれば、やがて墨汁を取り出して携へたる白紙にさら〳〵と書き附けぬ。

山鹿家の支流を酌むもの長陽吉田矩方竊に先生を奉欽慕、百里門下に來拜仕候旨趣は矩方遠祖は浪人衆にて和漢の兵學を唱へ罷在候處、元祖友之允と申す者に至り、藩の兵學師に召出され、君命にて候や江戸へ罷り登り藤介先生諱高基に學び、武教全書一部且築城祕事七條、侍用武功祕事四條、並に大星傳三重傳その他附屬の書數部まで傳はり歸り藩中にて其の傳を廣め候由爾後箕裘の業追々精研可仕の處不幸にして早世打續き僅々百年の間世次七八をも經報本の禮曠くして豹懶に愧るのみならず流儀作法も書にのみ殘り何とも無覺束殊に矩方甫め六歳にて父を喪ひ父執の流儀に老ひたる者に便り相學び候得共稟性陋劣不才未だ其の尊領を得ず推量の鄙見徴を取る所無之是に於て執事の門下に遊び大いに本源を究めたく存じ付き候矩方素より其の任に堪ざるながらも本分の職逃るゝ所なく遠く元祖の業を繼ぎ候微志に候間伏して祈る執事藤介先生の意を體認あらせられ下學矩方如きもの忝も其の道を頼むべからしめ給はゝ矩方應佩如何ぞ哉伏して區々を左右に布く吉田矩方頓首再拜敬白

これ松陰が玄關にて認めたる文面なりき、

『恐れながらお執次ぎを願ひ存ずる、一兩日の中重ねて御意を得るでござらう』

云ひ置いて其處を出でしが、秋の日は尙高し、空しく旅館に歸るにてもなければその足にて彼の葉山左内の家を訪ひぬ、左内は一藩の家老職、家も富み、學問も優れ、練塀長く續きて、中に老松の蓊鬱たるが聳えき、松陰はずッと入りて、

『大夫御在宅でござるかな』

執次に出でたるは年老りたる用人なりき。

『あなたは』と不審の眼を光らせぬ。

『長州萩の家中、吉田寅次郎でござる、御主人御在宅でござるかの』

『いや、只今はお留守ぢや、今日は沖へ殺生にお越しでござる』

（五十八）

『御主人沖漁にお行かの』と松陰は念を押す如くに云ふ。

『殆ど毎日の事でござる』と執次の老人は事も無げに答へつゝ『然し、程も無く歸らせられう、遠路をお入來ぢや、暫くお次で休ませられ』

執次の老人は極めて心切なりき、松陰が遠く長州萩より來れりと聞きて、具に遠路の勞を慰むるなりき、松陰はその眞心を歎びつゝ、

『さらば暫く……　お邪魔しても宜しからうか、實は只今山鹿先生をお訪ね申した處折惡しく御病中と申す事でござつた』

『少しも構ひ無い、これで主人お歸りを待たせられ』

秋深うして塀の砌に殘菊の香り老ひ、松風の音忽ち絶えて石甃の上に其の露滑かなり、松陰は執次の老人の厚意に由りて、玄關の次の間に坐を與へられ、草鞋に疲れたる足を休むる時、玄關にどやく〳〵と人の歩音して、供に立ちし下僕なるべし、高く『お歸り』と呼ぶ聲す、之に促されてばら〳〵と式臺に出迎へるは、彼の執次の老人と外に三人の用人なりき、松陰は襖の間より今歸り來りし主人といふを見るに、年紀は六十餘りならん、霜を抽んずる髮の毛は白く、長き髯は宛ら白銀を束ねたるが如く延びて、眼の光りきら〳〵と人を射、潮風に洒らされたる面の色飽くまでも黑く、生々せる生氣自から眉宇の間に見ゆ、身には稽古襦袢の古く垢づきしを着て、その上より紺地小倉の袴、鮫鞘の大小を前半に挿みて、紺木綿の羽織を着たるが、袖にも袂にも深く藥の香の泌みたる樣、式臺に腰掛けて、穢れ

たる脚袢を解きながら、

『誰か參りはせぬか』と澄みたる聲なり。

『遠來のお客樣御入來、次の間にお待ち難ねでございます』

『誰方ぢや』

『長州萩の御家中、吉田寅二郎殿と承つてございます』

『おゝ』と左内は起ち上つて『吉田姓お入來か、それは意外、何れにお在でぢや』

『旦那樣、御存じで在らせられまするか』と用人は重ねて問ふ。

『逢ふた事は無いが姓名は承つて居る、すぐ奥の間へ御案内申すぢや』

『お勞れはござりませぬか』

『少しの勞れはあらうとも、遠來の珍客を長うお待たせ申しては濟まぬ』と左内は他の用人を見返り『今朝は和でよく獲れた、中に鱸の大きいのがある、彼を膾にして一獻參らせ』

『心得てござります』

『吉田姓お尋ねとは意外、衣服を改めてお目に掛る』

左内は斯く云ひ切りて奥に入りぬ、前の執次の老人は松陰の前に立ち出で、

『只今聞かせらるゝ通りぢや、すぐ御逢ひなさせられうとある、いざ奥の間へ入らせられ』

松陰は執次の老人に案内せられて、奥まりたる座敷に通る、廻り縁の八疊、清く美しく掃除せられて、床の間には賴山陽筆の櫻花の詩、その前に黑革威の鎧、その前の刀架に赤銅作り蠟色鞘の大小が架けあり、火桶の中よりたよ〳〵と昇る香の煙、前栽の棠壇は三葉五葉紅葉して、夕陽の色面白う照る、松陰暫く待つ間に、左内は衣服を改めて徐々と入り來りぬ。

（五十九）

まづ初對面の口上終りて、松陰と左内とは少し斜に相對して坐を占めぬ、一個はまだ壯年の俊才、遠路の勞れは眉の間に見えて、色黑く眼のみ光り、一個は六十三の老體、潮風に吹き晒らされたる面の色黎く、白銀の絲を束ねたる如き髭に掛る息宛ら尾花に霧の降るが如し、松陰は一朶の梅花、左内は一幹の老松、自から態度

異りて、然も其の間に一點の至情通じぬ、松陰は暫くして、

『御老體今日は沖漁にお越しと見えます』

『沖漁は毎日ぢや、今日に限つたことはござらぬ』と左内は愛嬌の無き言葉。

『御老體の御身を持たせられて、毎日御漁を爲されまする喃』

『私ばかりでは無い、これは當家中一般の事ぢや、御存じの通り當地は三面悉く海、それに由つて公務の餘暇、海へ出て魚を捕るを第一の樂みに致す、暫く御滯在になると分るが、當藩家中一人として舟の用意を致さぬものは無い』

『御家老職たる鶯大人に置かせられても矢張り日々荒波の間を往來遊ばすでござりまするな』

『勿論の事ぢや、揖者、當年六十三歳に相なるがまだ一日も海漁を缺かしたことが無い、海島の武士は常に波の間に揉まれて、その心膽腕力を練つて置かぬと、まさかの時の用に立たぬ、元來西國の大名は、古から海戰に妙を得て居るが、近頃頓と海の修練を致さぬ、左樣な事で外夷を攘ふこと思ひも寄らぬ、斯う申しては如何ぢやが、小藩ながら當家中の武士、少しも昔を忘れる事が無い、萬々一御國の大事とある時は、この瘦腕に襷を推して、彼の異國船の鐵きをも粉碎する心で居る萩は毛利殿御領國、武事を以ては九州四國に併ぶ者も無いとしてある、定めて鍛練の御方もござらうの定めて御家中御用意の他に優れた處もござらうの』と云ひ掛けて心附きたる如く『これは餘事、打ち見た處、まだ二十前後の御壯年で在らせられる樣ぢやが、斯る邊卑へ何んの御用あつてお越しなされたな』

『申し後れて相濟みませぬが、私家は代々山鹿流兵學指南を勤め居りまする』

『いかさま、夫で山鹿萬助をお尋ねなされたのか』

『御意の通り、萬助先生は私ども家學の正統で在らせられまする』

『ではまう萬助に御對面か』

『當地着とすぐお屋敷へ參上致してござるが、折惡く御病氣中と申す事でまだ拜顏を得ぬでござりまする』

『爾うあらう、病氣では無くとも、一面不知の人には容易に對面せぬ、諾し〳〵』

と左内は世にも心切に『私が添書を附けて進せう』

『有難う存じます、左樣相成れば此の上の歡びもござりませぬ』

松陰は左内の詞を聞きて、一方ならず其の心を鼓舞されき、其の心を刺戟されき。平戸は六萬石餘の小藩なれど、領主松浦壹岐守殿嵯峨源氏の正統として遠祖式部卿法印鎮信公以來少しも武威を落されたる事なく、連綿として國を持するは家に葉山左内先生の如き忠良大剛の士あるに由る、家の支へは棟梁にあらず知行にあらず、正しく家臣の忠心義膽に由る、われ幸ひに武士と生れたるからは、左内先生の如き氣節、左内先生の如き勇氣、左内先生の如き意氣をもて、一藩青年の指導となり、一藩忠義の魁となり、お家を泰山の安きに置き、更に國威を萬邦に輝かす事をせん、百聞一見に如かず、家に在りて萬卷の書を讀むより、外に出でゝ、一人大義の士に接するが身の爲なりと、君侯の訓へ給ひしは此處なり、父叔父の心附け給ひしは此處なり。

松陰はその夜更深くるまで左内の議論を聽きぬ、左内の談話を聽きぬ、その中には史談あり、其の中には經義あり、更に其の中には砲術兵學の事もありて、旅の勞れを忘るゝまでに、面白く樂しく耳を傾けき。

（六十）

山鹿萬助は遂に松陰に面會しぬ、松陰は一方に左内の如き知己を得、一方に萬助の如き師を得たるなれば、旅にある事も忘れて日毎に專門の書冊を讀みぬ日ごとに左内の許を訪ひて、古今東西の歷史を談じぬ、左内と松陰とは年齡に於て親子ほどの相違あれど、その交情に刎頸の親しみあり、松陰は斯くして平戸に止まること一月に餘りしが今はとて長崎に志さんとしぬ、その前夜左内は松陰を家に招きて、

『明日は愈御出發かの』

『永々御雜作を掛けてござるが、山鹿先生にも御暇を戴きたれば、明日は長崎へ出發致さうと存ずる』

『御都合もござらう、お引き止めは致さぬ、山鹿甚五右衛門お知りやつたか』

『素行先生を知つたかとは、さて異なお詞をきゝまする喃』

『いや、兵學家としての甚五右衛門ではない、萬助は甚五右衛門を只兵學者とし

て尊敬するが私の目は違うて居る、甚五右衛門は古今の豪傑ぢや、彼の兵學には精神がある』

左内の詞は言外に深き意味あるが如くなりき。

萬助が松陰を教授せる外に、或る教訓を與へんとする樣見えぬ、松陰は憮然たり

『貴殿は聖教要錄をお讀みか』

『素行先生一代の熱血を注がれたは、その聖教要錄と承はるが將軍家忌に觸れて絶板を命ぜられたとある、まだ讀みませぬ』

『さらば武教餘錄はの』

『寫本を一讀致してござる』

『武經本論はの、手教餘錄はの』

『皆一讀致してござる』

『大分お讀みぢや、さらば甚五右衛門精神も御推量でござらう』

左内は重ねて問ふ、松陰は又憮然たりき。

『甚五右衛門は何故將軍家のお怒りに觸れて、播州赤穗へ左遷せられたかの』

『程朱の學問を惡口致したからでござる、程朱の學問は上大名から下庶民に至るまで、一人として尊信せぬ者は無いほどの勢ひであつた、それを辯難抗擊せられたのは、偶〻先生の學識を見るに足るでござる』

『再びお尋ねをする、赤穗の遺臣が主の怨敵たる、吉良殿御屋敷へ攻め入つて、彼の首級を給はつた、その忠節義烈の志を起したは、抑も何に基くと思し召すの』

『山鹿先生の、大精神が、四十七士の胸中に傳はつたからでござるよ、吉田忠左衛門堀部彌兵衛など、皆な親しく先生の薫陶を受けて居たと申すことぢや』

『おゝ』と左内は膝を拍つて『それを御會得か、流石は吉田姓、貴殿は兵學者の甚五右衛門を知らせられたばかりではない、正しう大英雄の甚五右衛門を知らせられてある、貴殿は死んだ學問を爲させられず、確に活きた學問をしてお在でぢや、此の上の希望はその學問の力を以て――いやさ甚五右衛門の大精神を以て、大きな吉良上野介をお打ち下さることぢや面前に甚五右衛門の薫陶は受けられずとも、甚五右衛門沒後第一の門弟は貴殿と存ずる、東の空には大きな吉良上野介が傲然と控へて居る、昔の門人は忠義の爲に主の仇を報ゆる、今の門人は

御國の爲に、御國の仇を切り殺してたもらねば相成らぬぞ』

松陰は默して左内の云ふ所を聞き居たり。

『甚五右衛門生前の門人は、末代武士の花と呼ばる、大仕事をして、千歳の後までも名を殘した甚五右衛門沒後の門人も、それに負けぬほどの美しい名を、後の世に垂れてたもらねば相成らぬの』

『御敎訓は骨に銘じて、死ぬるとも忘却仕らぬ』と松陰はきつと云ふ。

『我等申す言、お聽き入れ下されたか、さて云ひ甲斐のある、何もないが貴殿送別の爲、手漁の勝魚を料理、田舍酒を一盃獻ずる、まづ待たせられ』

（六十一）

即て杯盤は運ばれぬ、左内はまづ盃を獻して、

『一つ獻ずる、潔く受けさせられ』

『辱く存ずる』と松陰は浪々と受け『お志の御酒嬉しく戴く』

左内は立ちて庭に降り立ちぬ、前栽には一幹の老松亭々として天に聳えぬ、左内はその一枝を折り來りて、

『時に吉田姓、この松は我等屋敷中に最も古くある名物、何日の代からか鎧松と呼んで居る、この皮の樣が、宛ら鎧を着た如くに見える、我等號を鎧軒と云ふも、これから出たのぢや、篤と見させられ』

云ひ終りて松陰の前に置きぬ、松陰はこの一枝を見ると共に、何とも云ひ知れぬ一種の感胸の底に滿ち來る。

『鎧松の事は國許にある時から聞いて居る、私居村は松本村、それに因んで松陰と號し居る、貴所は御庭内の松に由て、鎧軒と號せられる、先天に深いお約束でもある如く思はれますな』

『その一枝を記念に參らする、翠の色は褪せることあつても、二人の交りの變る事はござらぬぞ』

『身に占めて頂戴致す』

『その松の操を心と爲させられ、それに拙者の眞心を籠めて置く』

松陰は鎧松の一枝を押し戴いて懷中しぬ、後は又酒の世界なりき、後は又甚五右

衛門の噂なりき、甚五右衛門の人物論に託けて互の心を語り合ふなりき。

松陰は翌日平戸を去りぬ、左内は城下盡處まで見送りて、勇ましく別れを告げぬ

彼が松陰に贈りし送別の詩は、長く彼地青年の間に喧傳しき。

松陰は平戸に滯在して、山鹿萬助よりその學問を注ぎ込まれ、左内よりその精神を吹き込まれぬ、平戸を去る時の松陰は、始めて平戸へ足を踏み入れし時の松陰にてはあらざりき、彼れは此處を去りて長崎に足を止めぬ、此處にて船來船の模樣を探見し見ん心あればなりき。

彼れはまづ支那の通辯に交りを求めぬ、久しく長崎にありて、彼我の事情に精通せる鄭幹介は松陰の爲に支那語の良師なりき、何事にも器用なる彼は暫くにして支那語の大體に通じぬ、由て幹介を通辯にして唐人町の樣子を見分しき、支那人の生活狀態より、風俗人情まで取調べ、次には又幹介を案内して、和蘭屋敷を見物し、遂に和蘭船に至りて、異國人の有樣を研究し歸りぬ、彼が異國船を尋ねて、異國人の有樣を見たるは、當時の國情、外國の風俗人情を知り置くべき必要ありと思ひたればなりき、果してその身の思ひ居れるが如く、尊王攘夷の議論を實際に見るに至らば、即て今日の研究の役に立つ時あるべきを思ひたればなりき。

支那人異國人、それ等の狀態を研究せる後、彼れは天草島原の地形を見、更に佐賀に轉じ大村に移り、十一月上旬飄然として肥後の熊本に入れりき、熊本には山鹿流の兵學家宮部鼎藏あり、まだ一面の識なけれど、同流の志士として、互に疾くその名を知り居たれば、まづ鼎藏の家を尋ねて、久しく履き馴れたる草鞋を脫ぎぬ、熊本には外に横井平四郎(小楠)あり、平四郎は村田清風先生の許に於て、曾て餘所ながらその風丰に接したることあれば、鼎藏を訪ひたる次には、必ず平四郎の家を訪ふならんと思ひしに、さはなくてその翌日加藤清正の廟所に詣でぬ、彼は何んの爲に萬事を擲ちてまづ清正の廟所に參詣したるか、是には所以あり、彼は旅路にある中も、片時家鄕を忘れたる事は無かりき。

（六十二）

『伏して惟るにわが加藤公、英武勇敢、威は三國に奮ひ、名は千載に傳はり、その神永く死せず、靈驗今に新たなりと申す、されば公の靈を祈る者は、躄も善く起ち、眇

も善く視る、公の靈威の斯民に功德あること斯の如く誰人か尊信せざるものございませう、私に一人の弟ございまする、生れて十歳、四體に何んの缺くる處もなく、九竅に異はらぬ處ございませぬ事に觸れては動き、物に觸れては笑ひも致しまするが、何故か物を云ひませぬ、口より出づる詞は只喃々として句切りもなく何事を云ひ居るを辯ずることも能きませぬ、父上母様お慈悲、憐しうも思召し、痛はしうも思し召し、醫藥に施さぬ處もなく、神佛に祈らぬ方もございませぬが、今に於て何んの驗もございませぬ、人の爲べき事は爲盡し、親として盡すべき事は盡されてございまするも、弟の口はまだ鎖がれてございます、大凡人は唯斯心を尊しとする、心動いて之を口に述ぶる、然も心の働きを口に述ぶること能はずば其の人は猶心の無いも同樣でございまする、心ない者が人でございませうか、抑も亦禽獸木石でございませうか、禽獸木石ならば忍ぶ事もございまする、四體に缺くる處なく、善く笑ひ善く動いて、唯物のみを云ふことが協はぬ、世にこれほど憐れなことございませうか、是ほど痛はしいことございませうか、私聞きまする朱明王守仁は五歳にして言ず、其の名を改むるに及んで能く言ふたとございまする、然もその言ふ處の道德百代も朽ちませぬ、天が非常な人を生るは、必ず非常の祥あるものと申す者ございまする果してさうございまするか、神德弘通十方偏く照す神明を瀆し奉る罪輕からずとも、願くば御利益を垂れたまへ、私たゞ當御神の御德に縋りまする』

これ松陰が清正公の廟前に稽きて、繰り返し繰り返し祈りたる聲なりき、松陰は夢の間も弟の不幸を忘るゝこと能はざりき、彼が長州を出發する時の目的は、平戸に葉山山鹿の兩家を訪ひて、兵學研究を爲さんとすると、長崎に唐船黑船を訪ひて、外國の事情を究めんとすると、今一つは熊本に清正公の廟所へ參りて、敏三郎の病氣快復を祈らんとするの三箇なりき、然も二箇の望みは果しつ、殘る一つの心の望みを、この神明に果さんとしつるなりき。

神が松陰の祈願を納受あらせられしか否か知らず、憐れなる弟の上に涯りなき利益を垂れたまふか無きか知れず、木枯寒く吹きて、神燈の光りいと寂びたり。

熊本に逗留し居れる中は、この地の同志を問ひ訪ねて、互の心を詰り合へる他、日ごとに清正公の廟所へ參りて、敏三郎の病氣全快を祈ることゝしき、當時熊本に

は正義の士多くありて、日夜微逐互に國事を語り合ひしが、松陰は多感の人、冬の夜の物淋しきに、窓撲つ雨の靜かなるを聞きては、不覺に親の事思ひ出されつ、不覺に妹千代の事想ひ出されつ、更に不幸なる敏三郎の事、多くの門人同志の事など思ひ出されて、歸心宛ら矢の如く、宵々ごとの枕に通ふは唐人山の風の音、指月灣の浪の響きなり、今は遂に堪へかねて、匆々歸鄕の用意に掛りつ。

態本にては横井宮部その他の同志に深く約束する事ありき、行く〳〵は志を一つにして國家の大事に殉せんとの事まで語りつ、彼れが一生を通じて最も深く交はりしは、この熊本の同志なりき。

（六十三）

松陰が鎭西に旅行せる間最も敏三郎に優しくし、又敏三郎に同情の涙を持ちしは重輔なり、重輔は松陰に勘當受けながら、松陰の弟妹その他に對しては、有らん限りの心切懇情を運びたりき、彼は敏三郎に優しくせるを條件として、松陰が歸りたる後、その勘當を容されんと思ひ計りき、彼の爲に只一人の知己たる久阪義助は、重輔に慫慂めて、敏三郎に文字を敎へさせぬ、松陰が歸るまでに、假し一字にても文字を敎へたらば、弟思ひの松陰はいかに歡ぶならん、歡びて重輔を德とするならん。

されど啞聾子に文字を敎ふることの難しきは、盲目に物の黑白を說くよりも尙難しかるべし、重輔は日ごとに杉家を訪ひて、熱心にこの難しき仕事に從ひぬ。

『敏坊よ、敏坊よ』と聞こえぬとは知りつゝも、人並に呼ぶ心となりて、お千代は敏三郎の脊中を叩きぬ、庭前に悄然と立ちて、南天の實の紅きを視詰め居たる敏三郎は、これに驚かされて振り返る。

『今日も亦重輔が來て呉れた、彼を御覽』と柴垣の外を指さし似す。

重輔は手織木綿の布子に、小倉織の袴を穿ち、鮫鞘の大小を横へて、滿面に笑を含みつゝ、一本高き樹の本に立ち居たりき。

『重輔、今日も來て呉れやつたか』とお千代は懷しげに『大儀ぢやの』

『敏樣相變らず御機嫌でござりまするな、さ、此方へお越し遊ばしませ』と重輔は手招きしぬ、不具ながらも重輔の眞心に懷き居れる敏三郎は斯くと見て嬉し

げに笑を見せつゝ、逸散に驅け行きしが、重輔の手にぶら下る如く顏を見上げて幾度も背後を指すは、姉のお千代を招き寄せよと云ふが如く憐れなり。

『お姉樣をお呼び申すのでござりまするか、宜しうございます』と頷いて見せ

『お孃樣敏樣がお招きでございます』

お千代も亦松陰の如く弟思ひなりき、重輔の立ち居れる樹の下へ驅け寄りて、

『其樣に重輔に甘へてはなりませぬ、昨日は重輔に千代といふ字を敎へられて居やつたが、忘れては居やるまいの』

『お忘れ遊ばす氣遣ひはございませぬ、流石は先生の御舍弟、中々御悧發でございます』

と云ひながら敏三郎に對ひて、手眞似に字を書く樣を見せ、更にお千代を指ざして、おのれまづ文字を書いて見すれば、敏三郎は忽ち覺りて、竹の枝を拾ひ取るより早く砂の上へお千代の三字鮮かなり。

『お孃樣、御覽なされませ、この通りお立派にお書き遊ばします』

『眞に綺麗に書きやることの、寅次郎樣お歸り遊ばして、敏三郎文字を書くを御覽じたら、何のやうにお歡びかも知れぬ、さうして假名文字は幾箇書きやる』

『假名文字はまだ十分に御會得が參りませぬ、然し先生お歸りまでには、どうかしていろは四十八文字をお敎へ申したいと存じて居ります』

『それが能きれば、どれほど自由に爲るかも知れぬ、口で物は云はれずとも、筆に文字を書きさへすれば、日用の事は缺くまい、これといふも重輔殿の御恩私からも禮を云ふぞえ』

『何を被仰ります、左樣なことを仰せ下されましては却て恐縮に心得ます、先生には一方ならぬ御芳情を蒙る身、これ位の事は當然の務めでございます』

折柄其處へ來りしは久阪義助なり、莞爾と笑を含みて、

『只今先生からお手紙、これで拜見すると、近々御歸國遊ばすやうに見えまするぞ』

（六十四）

『近々御歸國でございますると……』とお千代よりは重輔が急き込みて問

ひたりき、義助は沈着きて、

『熊本よりの御狀只今到着、歸途には柳川、福岡其の他の所々に風流を盡して、來月上旬――と申しても、十日ほど前の事ぢやが――それまでには御歸國との御事が細々記されてあつたのぢやよ』

『それは嬉しいこと』とお千代は手眞似に兄が近々遠き旅路より歸り來れる旨を敏三郎に告げ知らせて『汝もさぞ嬉しからうのう』

敏三郎は漸くに夫と察して、滿面に笑を含みたりき、彼は耳に松陰の熱誠を聞くことを得ず、口に心の歡びを云ふ自由を得ねど、松陰が敏三郎を愛する情の深きは、自由に敏三郎の心に傳ひて、不具の身にも松陰を杖柱と賴む樣見えぬ。

君に忠に、親に孝に、門人朋友に信義深き松陰は、その不具の弟に對して此上もなき同情者なりき、敏三郎は手を拍ちて、宛ら歡びに堪へざる如き樣を見せぬ、お千代は花の如く可愛らしき目に露を持ちて、

『重輔、これを見やいの、寅次郎樣お歸りと知つて、敏さんが此の通りに歡ぶことをよ』

『眞にこれは甚い、お歡びでございます』と重輔は手眞似をしつゝ、樹の枝を手に持ちて、砂の上に彼の知れる假名文字を書きて見すれば、敏三郎はそれに對ひて、覺束なげに一字二字の應答す、その文字は『あにさまおかへり、おうれしうございますか』と重輔の書き附けたるに對して『うれしい〳〵』と書きたるなりき、義助は太く感じて、

『や、敏三郎樣文字をお覺えか、これは感心、これは驚く』

『これも皆重輔の丹精でございます、重輔のお蔭で心の口が開かれたのでございます』とお千代は側より口を添へぬ。

『重輔、お身の敎授かゝりや感心ぢや、口も耳も一通りに働く子供にても、文字を敎へるは容易で無いに、これは口の利けぬお方、然も耳も遠くて在せられる、その お方に文字を敎へるは、是れや普通のことでない、それに今樹の枝で、この砂の上へうれしい〳〵とお書きなされた、お身の熱誠に由るのでなくば、どうして斯樣にお覺えなさることが能きやう、この手柄に免じても、先生御歸國御勘氣御赦免相成るは知れてある』と義助は感に堪へぬ樣なりき、甚く驚嘆したる樣なりき

『お褒めに預つて恐れ入ります、是れと申すも私の眞心を天道樣御憐ませ遊ばしたのでございます、二には敏三郎樣優れて御器用に在らせられるからでございます』

『夫もあらうが、全くお身の眞心が通じたのぢや、百合之助樣御夫婦もさぞ御歡びであらせられう』

『先生御歸國の上は、お嫂樣久阪樣よしなにお取爲を願ひまする、私は今一度先生のお袖に縋つて、眞の武士になりたいと心得ます』

『諾し、此の事は心配致すな、先生へは乃公が好いやうに……』と云ひかけたが心附いて『それに就いてお身に尋ね置くことがある、同道して町まで參れ』

『へえ、何れへでも參ります』

『福壽屋德右衛門、捌者彼の仁に用がある、お身も着合つてくれやうの』

重輔はハッと顏の色を變へぬ、福壽屋德右衛門へ義助を伴ひ行くは、心に忍び難き苦みなり、重輔と鹿の子との間は、尙曖昧の裡にその關係を繫ぎ居たるなりき

（六十五）

『どうぢや、着合て呉れるか』と義助は重輔が躊躇するをじろりと見つゝ『お身にも關係のある事ぢや』

『左樣でございまするな、御所望とあれば參上致さぬでもございませぬが、成るされど重輔は尙確としたる返答も爲し難ねて、

べくならば御免願ひたいと存じまする、實は私ちと急ぎの用もございます』

『では有らうが、是非お身を同道致さねばならぬ、殊には近々吉田先生も御歸國由て其までに話の着けたい事がある』と義助は聽す樣も無く『夫とも否か』

『否と申すではございませぬが……』

『否で無くば同道致せ』と義助は早や足を返して『お嫂樣お暇致します』

『眞にお匆々樣でございます、寅次郎樣お歸りまでには、一度お出でを願ひます母も定めてお目に掛り度く思ひ居らうと察します』

『勿論參る、宜しくお傳へを願ひますぞ』と詞强く『重輔さ參らう』

重輔も今は免るべき道無かりき、義助が切て徳右衛門の家を訪んとするは、如何なる仔細ありてにか明かならねど、詞の樣子にては、其身と鹿の子との事情に就て、何事をか詮義する樣にも見ゆ、鹿の子と我との間は表面手を切りたる如くにして、實は尙纒綿の情を繋ぎ居れるなり、我よりいかに捨てんとするも、鹿の子の執着は容易に去らず、幾度か追ひ拂へど、鹿の子の煩惱は犬の如く復來りて、甲斐なき緣を繋ぎ居る、久阪樣御說諭にて、二人の間を割き得るならば、我手我力にても、思ふ儘に割き得たるならん、泥田に足を踏み入れ居れるは、如何にしても口惜しと思ひながら、容易く脫き取る事の恰ひ難き境遇にある身の辛さは、眞に鐵の鎖もて手足を縛られ居るも同じ、久阪殿前にて鹿の子が例の濃艶き言を云ひは爲まじきか、我に對ひて恨みつらみの數々を列ぶる事は無きか、もし左もあらば久阪殿御機嫌を損じて、我の出世の妨げともならんを、嗚呼何とせん、彼とせん、と暫時は思案に詞も無かりき。

『重輔、何を致し居る』義助は催促して『早や參らうよ』

『お供致しまする』と據なく尾に從きつゝ『敬樣暫く失敬致します』

二人は打伴れ立ちて、徳右衛門の家を訪ひぬ、思ひ掛けず義助重輔の訪ひ來りしに驚きながら徳右衛門はまづ奥の間へ通し、茶、煙草盆、お手の物なれば菓子の珍らしきを盛りて出しぬ。

一應の挨拶終りたる後義助は忽ち膝を進めて、

『早速ぢやが鹿の子どのは居らるゝかの』と單刀直入に問ひ掛けぬ。

『宅に居りまする』と徳右衛門は重輔に目を配りながら『何か御用でござりまするかな』

『急に逢ひたい事がある、これへお招き下さるまいか』

『はい』と徳右衛門は氣味惡げに『何の御用か存じませぬが、性來の我儘者、久阪樣お前で御不禮があつてはなりませぬ、私承つて濟むことなら、どうか私へ仰せ聞け下さりませ』

『いや、お前では成らぬことぢや、お前の居る前で、ちよと尋ねたいことがある』

『へえ』と頭を撫でゝ『金子樣、どうした者でござりませうな』

『久阪樣御詞を背くことはなるまい、兎も角これへお呼びなされ』

『左樣仰せでござりまするなら、致し方ございませぬ、不束兒でございまするが久阪樣お目通りを願ふでございます』

（六十六）

德右衛門は遂に鹿の子を呼び寄せぬ、義助の前には鹿の子、重輔、德右衛門の三人が、宛ら木偶の如く居併びぬ、義助の息は自から暴くなり行く。

『談話と云ふは他でもない、承る處鹿の子どのは重輔と夫婦の緣結ばれてお在ちやさうな』

重輔も鹿の子も差し垂頭けるのみにて詞無く、二人の耳朶は火の出る如く紅く染まりき。

『其の事は私から御返答申し上げるでございます』と德右衛門は膝を進めぬ窓に當る暮影は漸々として温かなり『いかにも重輔殿とは夫婦たるべき御契約疾くに祝言も致す筈を御身上御都合ございまして、今日まで延引と相成た理でございます』

『夫れに相違あるまい、就て德右衛門殿へ相談ちやが、延引序に三四年が間、祝言の儀式お延しは下さるまいか喃』

『えゝ、三四年と仰せでございまするか』

『いかにもちや、如何にも是をお賴みするのちや、御存じでもござらう、重輔出世の志あつて、先年以來吉田先生御門下には加はり居るが、學問よりは鹿の子どの執心志ばかりあつて一向に進境が無い、それも魯鈍爲す所の無い愚物ならば、此の儘に打ち捨てゝも置くべきちやが、重輔は一かどの才子、松陰先生も殊の外御贔屓あらせられる錫や鉛の埋もれて居るのならば、掘出すも手間、土中に打捨てゝも置くべきちやが、早や白銀と相爲れば、少々は手間を費しても掘出し、お國の役に立てねばならぬ、重輔はその白銀ちや、まだ土中に在る白銀ちや、捨てるのは欲しい、拾ひ上げて光輝の出るまで研き上げるが、國を思ひ忠を思ふ者の務めちや、それも重輔に志無くば止むが、何とかして一人前の武士に成つて、國家棟梁の材に爲らうといふ、一婦人――と申しては失禮ちやが、高が婦人の情に纏綿て、出世の道を踏み誤ることあつては、重輔のみの不運で濟まぬ、只今申し上げた士中

の白銀、お家に取つて如何ほどの御損耗かも知れぬ、どうぢや、三四年手放して重輔を眞の武士にして下さらぬか、最愛の鹿の子、同じものなら眞の武士と祝言の盃させるお心はござらぬか』

『お詞は熟く分つてござります、久阪樣御主意、具に會得してござります、仰せの通り重輔殿は御家中にも珍らしい才士、吉田先生お側に附かれて、一かど御修業にも相成らば、御出世は目前に見えて居ります、眞の武士と祝言させる心は無いかとのお詞、私骨に沁みてござります、一應娘の心を聞きまして、確とした御返答申し上げまする』

『勿論爾うぢや、鹿の子どの對座を望んだは其處、そなたばかりが承知しても、肝腎の鹿の子どの不承知では何もならぬ、篤と意中をお聞き下され』

この物語りの間鹿の子は死したるが如く身動きだもせざりき、何處より吹き入るともなき春風、時に鬢の毛を撫で行くのみ、德右衛門は膝を進めぬ、

『今承はる通りぢや、そなたも重輔殿の妻、重輔殿御出世を願はぬとあるまいの』

されど鹿の子は答へなかりき、重輔は手頭に鹿の子の膝を突く如くして、

『どうぢや、御出世を願はぬことあるまい、久阪樣お待ち難ね、確とした返答致さねば相成らぬ』

『私と御祝言なさせられては、重輔樣御出世が能きぬのでござりまするか』

鹿の子は沈と垂頭れたるまゝ斯く問ひぬ、戀に縋れたる彼女の心は、餘所目に事なく見ゆる如く平穩にてはあらざりき、彼女は幾度浮世の波に揉まれて、あはれ深くも辭めるなりき。

（六十七）

『爾う惡う取つては爲らぬ』と德右衛門は慰めるやうに『久阪樣はお前の手から重輔殿を奪ひ取らうとは爲させられぬ』

『いえ私は……』と鹿の子は慄ふ聲を抑へ附けて『夫をお訊き申すのではござりませぬ、私がお附き申して居ては、重樣の御出世が能きぬのでござりまするか』

『まづ左樣ぢや』と義助は吃度云ひ切つて『書生に妻などがあつては爲らぬ

吉田先生は婦人に關係のある者を門人に爲させられぬ、由て重輔の學問修業中そなた他人になつて呉れねばならぬ、何うぢや堪忍して呉れまいか』

『重輔樣お身の爲となる事なら、何の樣な堪忍でも致します、良人の出世を願ふのは妻たる身の務めと心得ます』

『よく云ふた、その心掛けあつて始めて重輔の妻と云はるゝ、さらば三五年の間きつと往來を絶つて呉れるの』

『詞を交すことも能きぬのでございまするか』

『然し、そなた我等申す事を聞いて、三五年の間爲し難い忍耐致し呉るゝとならば、行く〳〵は一命に懸けても、きつと夫婦にして遣はす』

『そのお詞を樂みに淋しう御出世を待ちます』

『必然ぢやの』と義助は念を押して『是には德右衛門も居る、重輔も罷り在るその間での誓言、宮崎八幡起誓に掛けるか』

『二度お目に掛らぬ法もございます、私今の詞に微塵相違ございませぬ』と年若く心弱き乙女には清く立派なる詞なりき。

『途中で逢うても詞交すこと相成らぬ、假し他國他郷へ旅立ちする事ありとも未練に別れを悲むこと相成らぬ』

『はい』と鹿の子は唇を嚙んで『お上の御用、吉田先生の御爲とあれば是非もない事でございますれど、成るべくならば御當地で御修業、遠國へお行で遊ばすことだけはお止めなされて下さりませ、切て他所ながらお姿を見でもせねば到底生きては居られませぬ』

『爾う云ふは理りぢやが、此の約束は結ばれぬ、師の命は背かれず、何れへ旅行致すかも分らぬでの』と義助は心強く『其の代り後々は拙者が引き受け、命に掛けても添はせて遣る』

『御無理はお願ひ申しませぬ、切て遠國へお越しの時、お暇乞ひを申し上げる事特にお聽許を願ひ置きます』

『いや、夫れもならぬ、左樣な事先生のお耳へ入れば、重輔は直ぐ破門ぢや』

『是非もない事でございます』と鹿の子は絞り出した聲で云つたが『何事も重輔樣のお爲皆なお詞に從ひまする』

『そちも定めて辛からうが、何事も重輔身の爲、きつと我慢を致し呉れねばならぬぞ』

鹿の子は再び垂頭れて、切なる思ひを小袖の頭に嚙むなりき、云ふにも云へず包むにも包み切れぬ恨みを溢るゝ涙に示すなりき、この樣を見聞きする重輔は腸を斷たるゝ如く思ひたれど、久阪義助の前德右衛門の前別しては自己大志の前女々しき詞を出すべき要もなくて、沈と嘆きを胸に罩めぬ、義助は德右衛門父子を見廻して、

『德右衛門汝も承知ぢやな』

『勿論承知でござります』

『諾しそれ聞けば申し殘す事もない、拙者は是にて立歸る』

『まゝお宜しいではござりませぬか、何もござりませぬが、たゞ今お夕飯にてもさし上げまする』

『それには及ばぬ、不意に參つて雜作を掛けたの』

義助と重輔と伴れ立ちて歸り行くを、鹿の子は物見窓より沈と見送りぬ、三五年の間往來もならず、詞も交されぬ悲しさ辛さを眼に罩めて沈と見送りぬ。

（六十八）

十二月二十日松陰は鎭西漫遊より歸りぬ。

宵々ごとに夢みたる山川は我れを迎ふる如く目前に現れぬ、懷しく戀しかりし父母兄弟朋友門人は皆笑を含みて目前に見えぬ、松陰は云ひ知れぬ感に打たれき、初旅より歸りし心の切に嬉しきを始めて知りき、彼れはまづ父の家に入りぬ先祖代々の位牌に對ひて、恙なく歸りし歡びを述べぬ、更に父母の前に稽きて、不在中御心を煩はせし禮を述べぬ、人々は歡び涙なり。

『寅次郎樣お歸り遊ばせ』

刻むが如く驅け來りて、松陰の前に手をつくはお千代なり。口に無事を祝する聲はなけれど、顏面に滿腔の至情を漾へてお千代の袖の下に坐りしは敏三郎なり

松陰は見て、

『敏坊は暫く見ぬ間に甚う大きくなつた、どうぢや、相變らず物が云へぬか』

『口では云へませぬが、筆を持つやうになりました、さ敏坊よ』とお千代は弟の袖を引きて『寅次郎樣お歸り假名文字にお歡びを述べよ』と命じぬ。

敏三郎は早くも姉の心を覺りて、次の間へ驅け行きしが、即て半紙一面に、

『おめでとうおかへり』と書き附け來りて、松陰の前へさし出しぬ。

『や、これは……　敏坊字を書くかの』

『假名文字だけを何うか斯うか書くのでございます』

『是は意外ぢや、どれ〳〵見せ』と嬉しげに手に取つて『お芽出度うお歸りは氣が利いて居る、誰に敎へて戴いたな』

『重輔の丹精でございます、寅次郎樣お不守の間肉身も及ばぬ世話をして呉れました』

『ほゝ、金子重輔が……』と松陰は滿足の笑を見せ『其の上文字を敎へて呉れたか』

『普通の人に敎へるのとは違ひ、隨分苦勞したやうでございます』

『爾うあらう、こりや爾うあらう、人間の眞には情無き草木も靡く、敏三郎は草木ぢやない、口こそ利けぬが人の情は具へてゐる、重輔の丹精に感ずるのは當然ぢやが、然し暫時の間に此れほど文字を敎へるのは容易でない、厚く重輔に禮を云はねばならぬ』

『重輔申すに、私は松陰先生に聖人の道を敎へて戴く、その大恩に比ぶれば、敏三郎樣に假名文字を敎へる位、眞の九牛の一毛でございますと……』

『見上げたものぢや、暫くの間に眞の人間になつたと見もるの』

『何れ久阪樣からお話もございませう、元の通り御門人に遊ばしても、恥しいことはあるまいと心得ます』

『私は熊本へ參つた時清正公御廟へ敏三郎の不具回癒の祈願文を奉つた、その御利益が現れて、重輔の丹精に爲つたと見もる、口は利けいでも自由に文字を書きさへすれば、物を云ふも同然ぢや、心の働きを外に現すことも得られる、何れにしても芽出度い、重輔は參り居らぬか、逢うて泛々禮を云ふ』

『重輔は御勘氣の身、御門長屋迄參つて他所ながら無事の御歸りをお祝ひ申して居ります』と義助は次の間から云ふ。

『重輔參り居るか、さらば直に對面する』

『お逢ひ下さるか』

『いかにも逢ふ、然し』と松陰は深く心に掛る事あるが如く『近來の品行は何うぢや』

『例の女儀とも絶緣、一圖に讀書の人となつて居ります』

『それは重疊』と松陰は歎んで『すぐお呼び下さるか』

義助が心得て座を立たゝんとする時慶親侯より態々の使者參りぬ、寅次郎歸國のよし、急々面會致したし、長途の疲れあるべきも、早々出仕致すやうとの御諚なりき。

由つて松陰は萬事を捨て置き、直に衣服を改めて急遽御前へ罷り出でぬ、慶親侯御滿悅の樣、歷々と眉の間に見えき。

（六十九）

慶親侯御前にて何事を申し上げしか知れず、又何事を承りしかも知らず、二時ばかりの後松陰は徐々御前を退きぬ、鎌西諸藩に於ける學問、政治、人情風俗手に取る如く言上したるは云ふまでなからん。

家敷には人々皆な酒下物の用意して待ち受けぬ、山田宇右衛門同じく亦助、玉木文之進、益田越後、何れもこゝに駕を枉げぬ、次の間には多くの門人一團となりて坐り居たりき。

『重輔久しいの』と松陰はまづ聲掛けぬ、重輔は遙末座に坐を占め居たるが、松陰のこの聲を聞くと共に、嬉し涙をはら〳〵流して、二尺餘りを進みたるが、崩るゝが如く手をついて、

『先生、お懷しうございます』

『おゝ』と松陰も身を進めて『厚く禮を云ふ、弟敏三郎そなたの爲に甚う世話を受けたさうぢや』

『一向行き屆きませぬ、これも皆先生への御恩報じ、その萬分一を盡したのでございます』

『就いてはお前身の上ぢやが、久阪から詳しう聞く、頻つて學問執心で居るさう

ちや』

『志は以前と異りませぬ、先生のお手づから拜領した孝經一卷、今も身の寶と所持して居ります』

『人間は修業次第で、いかな立身出世も能くする』と松陰はきつと云つて『以後は專念に學問せよ、少しも仇し心があつてはならぬ』

『お袖に縋つて眞人間になりたいと心得ます』と重輔の聲は潔かりき。

『熱誠を以てすれば、啞聾子に文字を敎ふることも能くする、至情の徹する處、巨きい巖も動くといふ、勉めて倦む心なくばやがて立派な武士ともなれる、然し品行に缺くることがあつては爲らぬ、一本の指を猛火に沒する者は、遂に一身を焦すに至るぞ』

『御敎訓辱うございます』と重輔は愈潔く『私も久阪樣のお蔭で漸く眞人間に成つてございます』

『夢が覺めたか』

『長夜の夢始めて覺めてございます』

『それは重疊ぢや』と松陰は心より歡んで『以來は又屋敷へ參れ』

『御勘氣御赦免置かれまするかのう』

『以前に異らぬ門人ぢや』

『有難うございまする』

『そなたは私の門人、敏三郎はお身の門人ぢや、聞けばお身に懷いて居るといふ甘い物には蟻が集り、誠心には人が懷く、憐れな子供を宜しく賴む』

『私身に引き受けまして、敏三郎樣お手の動くやうに致します、お口こそ自由に動きませぬが、お心は怜悧う居らせられます』

『何分賴む』と松陰は敏三郎を側近く呼び寄せ『今日からは重輔を師と賴み將來は聖人の道をも聽くやうに爲れる』と書き似しぬ。敏三郎も松陰の心に感じて、

『おしゝやうさま、どうぞおねがひいたします』と紙の端に書き認めて重輔の前に出しその身は其處に平伏して、幾度も頭を下げぬ。

『及びもない事ではございまするが私身に協ひまする事は、きつと御敎授致し

まする』と重輔は誓ふが如くに云ひつゝ、有り合ふ筆を取り『おとなしうなされませ、おとうさまおかあさまへごかうかうをなされませ』

敏三郎は垂頭く、この憐れに情深き應答を見聞きして、人々は皆な感に打たれぬ人々は皆な涙に暮れぬ。

後は酒宴となりて歡聲宛ら湧くが如くなりき、師走の末の夜は更けて、木枯の音蕭々と檐を吹く、外は氷るが如く寒けれど内は春の如く温かなりき。

（七十）

其の後は松陰の身に變る事もなくて過ぎぬ、日ごと慶親侯御前に出て、家の學問たる兵法を進講する暇には、明倫校に出勤して多くの門弟子に同じ兵學を敎ふるを勤めとしき、松陰の兵學戰法には古人の口にせぬ未發見の議論もあり鎭西旅行に得たる研究材料は時々に行はるゝ羽賀臺の練習に用ひられき。

村田清風は年々に老い行けど、その後繼者として、松陰は一藩の尊敬を受けき、彼の師なりし玉木文之進、山田亦助、林眞人も亦次第に時に後れ行けど、松陰の學問には自然進歩ありて、入門の者引も切らざりき、久阪義助が高杉晋作を紹介せるも此の時なりき。

晋作が始めて松陰の門人となりしはこの年十九の春なりき、晋作の少年時代は品行極めて惡しかりき、武士の風上にも置かれぬ者として、人々は皆爪彈きしされど木犀の花は雨に撲たれながら香い、牡丹の花は風に揉まれながら尙群芳の上に立つ、晋作は當時已に一方の雄たりき。

金子重輔と鹿の子との物語は、久しく噂だも聞こえざりき、重輔は日となく夜と無く松陰の家塾に通へる他、杉の屋敷を訪れて、敏三郎に文字を敎ふるを務めとしき、敏三郎は幾年經ちても、聲を出すことなけれど、筆端はいよ〳〵自由に從つて智惠附きも惡しからず、如何なる事にても筆に談りて用を便するほどゝなりつゝ、これ然しながら重輔のお蔭、是然しながら重輔丹誠の發揮、重輔は敏三郎の產神なり、疎略にはならじとて、百合之助夫婦梅太郎、取り分けてお千代は重輔の誠心を歎びぬ、口は自由ならずとも、筆端に心の働きを似すことを得ば、世に不自由のある筈無し、お千代は重輔の來るごとに厚く待遇て、弟を救ひ助けられたる心

切の萬分一に報はんとしぬ。

お千代は十六の春を迎へて、花の姿月も羞づべく見えき、彼女が黒瞳勝の眼には何とも云ひ知れぬ愛嬌あり、笑を含みて垣の外に立てる姿は、一朶白蓮水を出づる趣ありて、見る者その美に打たれぬはあらざりき。

『重輔御苦勞ぢやのう、今日も來てたもつたかのう』

重輔は手に美しき山櫻の一枝を持ちて、今しも杉の家へ來りぬ、彼は何にてもあれ、まづ品物を似し置きて、然る後敏三郎に文字を敎ふるなりき、お千代はその姿を見るより早く緣外へ驅け出でゝ聲掛けぬ。

『敏樣在らせられますか』

『あなたお入來を待て居たが何處へ行つたかのう』とお千代は奥の間に驅け入りしがやがて敏三郎を伴ひて出で來りぬ、敏三郎は重輔を見るより叮嚀に手を突きて額を疊にすり着けぬ、お千代は其處へ机と料紙硯とを出して、

『此處へ來てたも昨日は松といふ字を敎はつて、今日は櫻を敎はるかのう』

『扨とこれへ持參してござります』と重輔は緣端へ膝行り上る、敏三郎は机の上に白紙を展べて、松といふ字を書いて見する。

『お美事〳〵』と重輔も亦その紙の端に書いて『私の持て居る花がさくらでござります』、さくらといふ字は斯う書くのでござります』と心切に敎へながら敏三郎の手を持ち添へて、櫻の字を書いて見せぬ。

敏三郎は頷きて、重輔の書きたる文字を專念に習ひ居りぬ、お千代はその樣を見て嬉し涙に暮れながら、

『私は敏三郎がようも此の樣に字を書くやうになつた、これも皆あなたお蔭と思ふと、嬉し涙が溢れるのでござります』

『何のこれしきの事松陰先生大恩に比べまするとまことの九牛の一毛でござります』

（七十一）

その中に敏三郎は漸く櫻字を書きて、重輔の前へ出しぬ、重輔は見て、

『お美事々々、隨分難しい文字を、ようこれほどにお書き遊ばした』と又紙の端

へ書いて見する、重輔の持ち來りし櫻の枝は、お千代の手して有り合ふ花瓶に挿まれき。

『私は斯うして敏三郎が日ごとに文字を覺え行くのが、何よりも嬉しいのでござります』と花の前より此方を見返る。

『もう少し文字をお覺えになりますと、今度は御本をお敎へ申します、根が御惻發のお生れ、孝經の一冊ぐらゐは何の苦もなくお覺え遊ばさうと存じます』

折柄入り來りしは百合之助なりき、敏三郎は見るより今認めたる彼の文字をさし示す、百合之助は嬉しげに見て、

『これも重輔丹誠、改めて禮を云ふぞ』と重輔に頭を下げぬ。

『左樣に被仰つて戴くと、私却て恐縮に存じます』と重輔は手をついて『只今お孃樣へお話し申して居た處、敏樣極めて御惻發、この分ならば普通の人間よりも立派に御修業が能きやうと心得ます』

『普通の者に物を敎ふるさへ、時々は心血を絞ることもある、況して之は耳聞こえず、口言ふことも協はぬ不具兒、これだけに文字を敎へるのは容易で無い、全く

お身の丹誠ぢや、これで聖人の道の一通りを知ることが能きれば、敏三郎は其の儘に死ぬるも可ぢや、厚く禮を云ふ』と云ひながら机の上の筆を取りて『金子姓の大恩は海よりも深い、死するとも忘れては相成らぬ』と嚴かに敎訓しぬ

『死すとも忘れませぬ、金子先生は神樣でござります』

敏三郎は斯く認めて、改めて父の前へ出しぬ、百合之助は愈滿足して、

『千代、重輔に餅でも燒いて遣はせ、近頃は惡い噂も聞かぬやうぢや』

『いえ、私ならば決してお構ひ下されますな、私はまだ先生の御用があります』

『まづ好い、もう少し話して行け』

百合之助、お千代が切に引き止むる袖を拂つて、重輔は足早に杉の家を立ち出でぬ、日は午時を過ぎて、天主臺の甍に立つ陽炎も長閑に、何處の霞の奥よりとも知れず聞こえ來る雲雀の聲極めて優し。

重輔が屋敷町を離れて、蕭疎たる同心町へ入らんとする時、雲の如く咲き亂れたる塀外の櫻の下に蕾の如く佇みしは鹿の子なり、日頃の苦勞に瘦せ窶れて以前の美はしき姿もなきが、頰の上に亂れかゝる鬢の毛を拂はんともせず、濕みたる

眼に露を含みて、

『重様々々』と淋しく呼ぶ、されど重輔は聞こえぬ風して、三歩五歩進み行く、その心強さを怨するが如く、重ねて『重様々々』

重輔は釘附けにせられたる如く歩を止めて、きと此方を振り返りたるが、鹿の子の姿が目に入ると共に、さも不快に堪へざるが如く眉をひそめて、

『鹿の子どのか、何をして居るの』と他人らし。鹿の子ははら〳〵と涙を溢して

『あなた何故その様に他人らしいことをお云ひなされます、久阪様のお詞に縛られて、餘所々々しう暮らしてはあれど、あなたと私との間に、そのやうな他人がましいお詞を聞く理はござりませぬ、もしあなたはな』

重輔はそれに答へなく、足早に去らんとするを、鹿の子は追掛けるやうに縋り着て、木綿布子の袖の頭をきつと捉へて、

『あなた私をお捨なさるので厶りまする喃』と恨み聲。

（七十二）

『これ何を云ふ』と重輔は取られたる袖を拂つて『そなた久阪様のお詞を反古にはすまいの、私は吉田先生御勘當も赦されて、今は一生懸命學問を修業してある、四五年の間と約束したあの詞を反古にはすまいの』

『お千代様お美しうござりまする喃』

鹿の子は一言、絞るが如き聲に只一言斯う云ひぬ、陽の光りは正面に鹿の子の頰を照す、痩せたる眉窶れたる唇眼の中にはあはれ一雫の露ありき。

『これ』と重輔は驚きて『そなた何を云ふのぢや』

『お千代様お美しうござりまするな』と鹿の子は冷かに笑を見せて『あなたさぞお樂みでござりまする喃』

『怪しからぬ言――』と重輔は顏の色を火の如くにして鹿の子の手をきつと握りぬ。

『云うては惡いのでござりまするか』と鹿の子は息を機ませて『お千代様お美しいもるお美しいといふが惡いのでござりまするか』

『物には云うて善い事と惡い事とがある、お千代様は吉田先生御妹では無いか

假し花のやうに美しう在らせられても、私に關係のあることではない、お前に關係のある事ではない、お前は久阪樣にお約束申した通り、四五年の間を大人しう待つて居るが好いではないか』

『さうして私を閉ぢ籠めて、あなたお一人面白い目を爲さるのでございまする哺』

『又その樣なことをいふ、私は錦を着てお前と祝言の盃するを樂みに、學問修業して居るでは無いか』と重輔は抑へ附けるやうに云ひつゝ『お前も私の心を知らぬでは有るまいし、今になつて何故そんな事云うて呉れる』

『お千代樣はお美しうございます、私のやうな身分のない三平二滿ではございませぬ』

『これ大きい聲をするな、人が聞いては吉田先生のお名にも關はる』と重輔は腹立たしげに『そなた何うすれば好いのぢやよ』

『どうすればとて……』と鹿の子はさめ〴〵と泣き入つて『私はあなたに捨てられたのが殘念でございます』

『思ひ違ひをして呉れてはならぬ、私が何日お前を捨てたのぢや、先日も云ふ通り、何うかして一人前の人間になつて、一は親の名をも揚げ、二にはお前の親父樣にも歡んで貰ふつもりで、夜の目も寢ずに修業はするが、まだ一時もお前の情を忘れたことはない、夜ごとにお前を夢にも見、日ごとにお前を思ひ浮べ、雨につれ風につけて、お前の幸福を祈らぬ時はない、杉樣の御三男敏三郎樣、そなたも知つて居る通りお口が利けぬ聾同樣に耳が聞こえぬ、そのお方へ文字を御教授申し上げるが私の役目ぢや、それも忍杉樣へは毎日行く、從いてはお千代樣のお目にも掛る、げれど私の心は定つて居る、お前に約束した言葉はかへぬ、虚言と思ふならこの胸を割つても見やう、情無い疑ひを起さんで、約束通り待つて居てたもらぬか、それとも私の云ふこと聞き入れてはたもらぬか、一度や二度のことではない、お前の返答次第で私の心にも思案がある』と重輔は詞に力を籠めて云ふ。

『どうぢや、確とした返答聞かせ、私は戯言にこの樣なこと云ふのでないのぢや』

『あア惡うございました』と鹿の子はわッと聲立てゝ『私が惡うございまし

た、どうぞ堪忍して下さりませ』

『さらば疑ひ晴らしたぢやの』

『今のお詞眞實なら、私少しもお疑ひ申すことぢざりませぬ』

（七十三）

『眞實とも眞實、私の心は神樣が御照覽ぢや』と重輔は更に詞に力を籠めて『さらば久阪樣仰せの事を熟く守つて呉れるぢやの』

『きつとお心變りぢざりませぬ噛』と鹿の子は尙心許なき樣なりき。

『心變りなどある筈はない、我等本意を達げた上は、お身と夫婦の盃する』

『そのお詞が眞實なら、三年は扨置き、五年が十年でも、優和しうお待ち申します、その代り……』と鹿の子は鋭き眼に重輔を視詰めて『あなた御違約ぢざりましたりや、私生きては居りませぬ、私一人死ぬる事ぢざりませぬ、それを御記憶ぢざりませ』

云ふ聲は宛ら三日月形せる眉の間を轉び出づる如く物凄かりき、險しき眼眦には嫉妬の影さへ見え、急しき息には怨恨の焰さへ交りて出でぬ重輔は伏目になりて、

『それは忘れぬ、そなたも忘れるな』

『此の命ある中は忘れませぬ、いえ〳〵』と鹿の子は云ひ變へて『假へ死んでも忘却は致しませぬ』

『さらば歸れ、他人の目に附いては爲らぬ』と重輔は一歩うしろへ退く。

『あなたお忘れなされまするな、お側には居いでも、あなたお行跡は私よう知つて居ります』

『お前の眞心に背く事はせぬ、德右衛門殿にも味好う云ふぢや』

『辱うぢざりますす』と鹿の子は稍沈着いたやうに『是れから何方へお行でなされます』

『宅へ歸る』

『夫れならお母樣へ』と袂より紙袋に入れし菓子を取り出で『これをお進げ遊ばして下さりませ、今度製きた乾菓子でぢざります』

『心に懸けて好い物を呉れたのう』

『御機嫌克う御修業遊ばせ私は何日までもお待ち申すでございます』

云ふを後に聞き流して重輔は落花繽紛たる間を歸り行く、鹿の子は其處に立ち盡して重輔のうしろ姿を見て居たるが、

『あれお待ち遊ばせ』と消魂しう呼び掛けて、足早に驅け寄る重輔は驚いて、

『何事ぢや』と立ち止る、衣物の襟に花の一片物凄し。

『此樣な物が着いて居ります』と笑ひながら指に摘む。

『喫驚したぞ何の事ぢや』と重輔も笑ひ顏鹿の子は摘みたる花片を唇に咬みて、

『花さへもお側に居たう思うと見えます』

『はゝゝゝ』と重輔は絞り出した聲『さらばぢや、そなたも歸れ』

夕暮の鐘遠き森より出でゝ、散りたげに見もる花の樹末を搗く、鹿の子はその花を頭より俗びつゝ沈と重輔の後姿を見送りしが、即て涙をはら〳〵と流して、悄れ勝に歩を返さんとする時、來掛りしは久阪義助なり。

『お身は鹿の子、只今これへ重輔が參りはせぬか』

『私は一向に存じません』

『はて爾ういふ筈はない、只今是れへ參つた筈ぢやが……』と義助は考へながら『一應宅を尋ねて參らう』

『もし久阪樣』と鹿の子は慌てゝ呼び止めて『何か御用でございまするかな』

『吉田先生急のお召しぢや』

『何事でございませうな』

『左樣な事お身達の知つたことではない』と愛嬌もなく袖を拂つて『さらばぢや』

（七十四）

高杉晋作と久阪義助とは松下村塾に於ける雙璧なりき、晋作は十九歳始めて松陰の門に入りたるなれば、義助よりは後の弟子なれど、彼の才名は當時已に一藩中に鳴り響きて、誰一人その名を知らざるはあらざりき、晋作が松陰に師事せし

時(嘉永四年)松陰は二十二歳なりき。

松陰は去年鎮西の旅行より歸りて、益〻慶親侯の信用を得き、同時に彼の學問見識に一段の進境を認めつ、その年正月は林眞人より極祕三重傳の印可返傳を受けき、慶親侯は屢〻松陰を御前に召されて、彼の講義を聽かせられき、慶親侯が山鹿流の兵學を善くせられしは、全く松陰の敎導に由れるなりき。

晋作が松陰に見えたるは、此の時なりき、久阪義助は實にその紹介者なりき、晋作名は春風、字は暢夫、號を東行と云ふ、言葉清く流るゝが如く好みて大言壯語をする、幼き時は詩を作り歌を詠み、專ら風流の道に盡したれど、十七八歳義助に交はりて、兵學に指を染めしより、專ら山鹿流の兵書を讀みぬ、松陰に師事せるは夫が故なり。

されど彼は自ら深く才を恃みて、多く書を讀むことを爲さゞりき。義助は温厚篤實、閑あれば書を繙くを勉めとしたれど、晋作は時に酒を被り、時に女に戯れ、泰山を挾んで北海を超ゆる樣の大言を吐きて、人を驚かすを例としき、松陰は晋作の素行の修まらぬを熟知れど、遂に一度も苦い顏を見することを爲さゞりき、重輔が酒に親しみ、婦人に關係せるを知りて、直に破門せしに比べて、その處置は極めて手緩かりき、これ然しながら松陰の優れたる器量、優れたる美質、優れたる待人法なりき、松陰は一つの色を以て何物をも同じに塗めんとは爲さゞりき、その人の性情、その人の氣質をよく見究めて、その人に適すべき色素を宛ひ、然して美はしき色彩に作り上げんとせるなりき、松陰の敎授法は他人の如く窮屈ならざりき松陰には別に一個の新しき躾方を持ち居たるなりき。

『先生は御不快で在らせられる、誰か代講を致さねばならぬぞ』

奥の間より立ち出でたる重輔は斯く云ひぬ、次の間の學堂には、多くの門人詰め居たりき。

『代講なら乃公がする』と壁に凭れて頤の下を撫で居たる晋作は云ふ。

『高杉殿爲させられるか』と義助は優和しくきと晋作を見返りたりき。

『何んでもない事ぢや、今日は武敎全書の守城篇であつた』

『いかにも左樣』と重輔は一座を見廻して『たゞ今お聞きの通り、高杉殿御代講を爲させられる』

一同は互に顔を見合せたれど、誰も不平を云ふものはあらざりき。塾頭には久阪義助あるを、新參の身を以て自ら代講の任に當らんといふ、身分を顧みざる仕方と心には面白からず思ふもありしが、辯舌に掛けては晋作の矢表に立つ者なし。憤いに故障を云ひて、一言の下に刎ね附けられることありてはなるまじと、據なく口を默みて彼の爲んやうを見詰むるなりき。晋作は重々しさうに書物を開きて、

『まづ籠城の大將心定めの條を講ずる、何れも聽聞さつしやい』

云ふ時間の襖を颯と開きて、顔を出せしは松陰なりき。

『誰ぢや、左樣なことを申すは』

『高杉殿御代講でござります』と重輔は側から云ふ。

『晋作が……』と松陰は不興氣に『酒飲みが何を爲るものか、人に物を敎ふる者は、まづその身を心から正しう致さねば相成らぬ』

（七十五）

晋作は言句もなく默居たり、多くの門弟子は何れも其意を得たる如く、晋作の顔をさし覗く。

『聖人の道はまづ己を正うして後人に敎ふる、孟子の所謂昭々を以て人をして昭々たらしむるの義ぢや、お身は徒らに美酒美食して、さうして大言壯語するさうぢや、道は讀書の間に得られるが、大言壯語の間には得られぬ、代講して能くば義助に申し附ける、己正しくない者が何うして人に敎ふることを得やう、例へて云ふと一家の主人たる者、己のみ美食安坐して、妻子奴僕に儉勤を命ずる樣なものぢや、己れ自らを節する事なくして、妻子奴僕に身を節しよと責むるとも、之を聽き入れる者ある筈はない、怨まざれば怒り、嗤はざれば謗る、お身もちと本を讀め』

晋作は稠人滿座の中に此の辱めを受け、顔を火の如くしてさし垂頭く。

『代講は義助がする、義助は自ら持する事に於て併ぶものが無い、誠意の無い講義はいかに聲が大きうとも上の天を行く、詞に誠意誠實の心があらば、聲は微さくとも意味が徹底する、酒臭い息で聖人の道を說くことは能きぬぞ』と松陰は

叱るが如く云ひ終りて、やがて奥の間に入りぬ、後には晋作の吐息、諸門人の感嘆義助は氣の毒に晋作を見て、

『高杉姓、お氣に障へられるな、決してお氣に障へられるな、先生今日は御氣分が悪しいと見もる』

『いかにもお恥しい、拙者穴があらば入りたく思ふ』と晋作は太い息をついて

『全く拙者が悪かつた、今日といふ今日、長夜の夢が覺めてござる』

『さらば先生只今のお詞をお怨みにはお思ひなされぬな』

『何として左様な事、拙者如きをも門人と思し召せばこそ只今の如く渥き御教訓を下し置かるゝ、眞に拙者自ら正しき道を行かずして、却て人の眞を嘲り誘らうとした、猿は己の獣なることを知らずして、人間が樹の枝を傳ひ得ぬのを笑ふと聞く、いかにも恥かしい、拙者は人間を笑ふ猿よりもまだ劣つて居る』

晋作は深く心に覺る所ありき、今日までは才を恃んで學問に志す事淺かりし身が今の一言に厲まされて、倍倍勉強一人前の身と爲らんと志しき、晋作の學問の甚だしく進みたるは此の時よりなりき、性來の放蕩を懺悔して專念に學問に志したるは此の時よりなりき。

松陰は云甲斐ありしを歎びつ、晋作が眞面目に學問するに至りてより、事ごとに晋作を相談相手としつ、晋作は松陰の爲に最も怜悧き參謀なりき。

義助はこの様を見て『高杉姓は當代の才子、到底我等の及ぶ所にあらず』と云ひ、晋作は又義助を評して『久阪姓は一代の奇傑、とても我等の肩を比ぶべきではない』と云ひぬ、松陰やがて此の事を聞き『義助晋作互に斯く讓り合ふはまこと此の上もない國家の慶事ぢや』と膝を拍て感嘆しき、晋作義助を松陰門下の雙璧と云ふに至りしは此の後なり。

松陰はその年三月、慶親侯參勤の御供して、江戸へ赴く事となりつ、名は參勤の御供なれど其の實は兵學の研究なり、學問の修業なり、松陰を我が子の如く愛したまふ慶親侯はこの行に由りて松陰の心を玉と研すべき御計畫なりき、松陰も亦いつか一度は江戸に遊びて、天下の形勢を見んとする希望あり、歡び勇んで御受けしつ、これ松陰の一生中に、二度とあるまじき大事の首途なりき、松陰の供としては彼の金子重輔選まれぬ。

（七十六）

慶親侯萩城の出發は當年三月六日と極りぬ、五日の朝よりは杉家の大廣間へ、松陰の門人故舊皆集りて、この名譽ある首途を祝しき、君侯御目鑑に協ひて、江戸御供の數に入るさへ、此の上も無き幸福なるに、君侯思召は、松陰をして一藩の兵學家に成さん深き御心ありてなりと知りては、誰とてその首途を羨み稱へぬはあらざりき。

松陰が出發の用意に混雜する如く、重輔も亦出發の用意に混雜しき、重左衛門夫婦は我が子が見違へるほども立派な男となり、然も多くの門弟子中より選まれて、江戸の供を聽されしを此の上もなき名譽として、逢ふ人ごとに自慢の鼻を高くするなりき、松陰のお蔭にて一人前の人間となりしを天に歡び地に悦ぶなりき、此れにて幸ひに御目見得の協ふほどに出世せば、重左衛門は其儘死すとも恨む所無しと思ふなりき。五日の朝重輔が衣服を改めて松陰の許へ赴かんとするを呼び止め、

『そなた此れから何れへ參る』と何日になく丁寧な詞なりき。

『先生お屋敷へ參らうと存じます、出發は明日、何かに付けて御用もある事と存じます』

『ではあらうが暫く待て、家に取り身に取り此のやうな茅出度い事はないと云うて、母が膾を作つて居る、久しく禁酒して居るやうぢやが、今日ばかりは關はぬ乃公が手づから酒を一升買うて參つた』

『有難うございます、それでは一獻頂戴致しませうか』

『少しぐらゐ遲くなつても、先生の御機嫌を損ねることはあるまい』

『先生、さほど狹量では在らせられませぬ』

『爾うあらう、では緩りと祝うて行け、明日は未明のお立ちといふで、緩々盃を酌み交す猶豫もあるまい』

『お母樣』と重輔は臺所の方を向いて『御雜作を掛けて濟みませぬ』

『何のいの』と母は膾を皿に盛りつゝ『お前が出世の首途ぢや』

『私もお手傳ひ致しませうか』

『いや〳〵』と母親は頭を掉て『恰ど石魚の旨しさうながあつたもゐ、これを尾頭にして供へる、お前は今朝のお客樣、お客樣にお手傳ひを賴んでは濟むまいわいの』

『夫れでもお母樣お寒くはござりませんか、臺所に長くお立ち遊ばしてお身體に障つてはなりませぬ』

重左衛門は側にありて、重輔の詞をつく〳〵と聞き居たるが、嬉しげに、太き眉を動かしながら、

『これ今の詞を聞きやつたか、重輔がこれほどの事を云ふ、一時は泥土の中へでも捨てやうかと思つた倖が、斯ほど孝行にして呉れる、何と有難いことでは無いか、然し是れも詮ずる處、松陰先生のお蔭ぢや、先生の御恩を忘れては相成らぬぞよ』

『私は起きるにも寢るにも、先生の御恩を拜まぬことござりませぬ』

『眞に重輔は幸福ぢや、よいお方をお師匠樣に持たぞ』と歡び涙押し拭ふ。

『何もないが、私の眞心を味うてくれるのぢや』と盃は黑塗の膳に、尾頭賸、赤飯の色々を載せて、重輔の前へ運び出す、重左衛門は盃を取り上げて、その身まづ一獻やがてそれを重輔に與し、

『芽出度う祝うて、それを母へ參らするぢや』

重輔は盃を受け載き、

『お情有難く載きまする』

（七十七）

『改めて云ふまでもないが、そなた松陰先生の大恩を忘れては相成らぬぞ』と重左衛門は同じ事を繰り返して云ふ。

『假し天道が西の山を出る時ござりませうとも、先生の大恩を忘るゝ事致しませぬ』と重輔は詞强く『今度のお供萬々一お身の上に事あらば、一命を捨てゝ報恩の道を盡さうと心得居りまする、さすれば今朝の別れが、長のお別れとなるかも知れませぬ、その時は父上母樣ともお身を大切に遊ばして……』

『えい〳〵』と母は我と我耳を塞ぐやうにして『もう〳〵そんな驗の惡いこ

と云うてたもるな、假し如何やうな事あらうとも、お前の身に萬一の事あらば、私がきつと替人に立つ、私の命はお前の丹誠で助かつたのぢや』

『然し、節義の重きに比べると、命は物の數でない、生て高祿を載くと、死して譽を千載の後に殘すとは、其の間に些の上下も無い、苟にも兩刀を帶する者は、義の爲に死ぬるを潔とする、義に死する者は、その名が何日何日までも生きる、命を惜むあまり、節義の二字を忘れては爲らぬ、節義の二字の伴はぬ武士道は、到底が眞の道でない』

『お父樣御敎訓、私心を得てござりまする、私今日の初旅は死を覺悟しての首途でござります、私の身に萬一の異變ござりましたら、其の時は鹿の子の上を宜きに願ひまする、彼女は優れて執着に深うござりまするが、それでも人に懷い處ござりまする、世に捨て難い心もござりまする』

『それを懸念するな、祝言こそせぬが、親と親と約束した事もある、德右衛門と相談、そなたの名を辱しめる事はせぬ』

『夫さへお願ひ申して置けば、其の外に心の殘る事ござりませぬ』と重輔は前にある盃を傾け盡して、それを膳の上に伏せ『芽出度う出發致します』

『云はでもの事ぢやが、途中に氣を附けて、江戸着の上は忘れぬやうに手紙出すぢや』と母は精神が知らするらしく止途もなく涙に暮れつゝ、魂は最愛の子の懷に入るかと思はるゝまで切なく見えき。

庭の外には櫻の花靜心なく散りて、彌生の日影麗かに、或る何事かを豫報するが如く、老鶯のさゝ鳴くが近くに聞こゆ。

『先生お待ち難ねと察しまするで、私今より參ります、何れ夕方には歸つて、何かのお心附けを承はるでござります』

『その時までにお羽織も縫うて置く、お父樣はお前に挿させうと云うて、家重代伯耆椽橘國照のお佩刀に研をさせてお在で遊ばす』

『私に彼の國照をくださるのでござりまするか』

『初旅の餞別に取らする』と重左衛門は重い調子『家重代で手柄をするぢや』

『先生のお身を守ります、先生のお身を守るは軈て私の身を守るのでござります』

『諾し』と重左衛門は頷きて『行け〳〵』

重輔が勇ましく縁側へ出づる時、福壽屋の丁稚は花吹雪の中を驅け來たりて、

『主人が申します、重輔樣に一寸お越し下さりませ、決してお手間は取らせませぬ、取り急ぎ申し上げたいことでございます』と口早なりき。

『心急きの處あア困つたな』と重輔は頭を掻いて『お父樣何うしませう』

『德右衛門殿御口上とあるを反古にはなるまい、ちよとお寄り申せ』

『やはり參らねば爲りませぬかな』と重輔は進まぬ樣に『さらば直行く、德右衛門殿に左樣申せ』

丁稚は心得て立ち去りぬ、後には東風そよ〳〵と落花を吹く。

（七十八）

重輔は急ぎ足に同心町を出放れて、蕭然たる垣根に添ひつゝ、町方へ急ぎ行く彼方より、さも急きたるやうに來掛りしは德右衛門なり、重輔の姿を見るより驅け寄りて、

『重樣かやれ待ち難ねた、私の家へ來て下さるか』

『只今お使ひ、何事の御用かと取る物も取敢ず、これまで參つた所でございます』と重輔は騷ぎたる樣も無かりき。

『聞けばそなた先生のお供して、急に江戸へ行かつしやるさうな、夫れなら夫れで何故娘に得心させて下さらぬのぢや、何日までも他人らしう、夫れほどの一大事を打ち明けて給らぬとは、恨みぢやぞや〳〵』

『お怨み御有理ではございまするが、何を申すも急の御用、殊には初旅先生の御準備もございます、私は私で佩刀の一口も用意せねばなりませぬ、夫や是やに追はれて、まだ御相談にも參りませぬが、然し決してあなた樣を輕侮に致したのではございませぬ、今夜までには御用片着く、その上で緩々お暇乞ひに出るつもりで心構へをして居たのでございます』

『それならば好いが、私は又無斷で江戸へお立ちかと氣を揉んだのぢや、いや私ばかりなら何うでも好い、例の娘が昨日誰やらから其の話を聞いて、今にも手の中の玉を奪られるやうに叫き居る、それを色々云ひ慰める切なさは、子を持たぬ

お前などの知らぬ事ぢや、今使ひを進せたも、お前の口から鹿の子に納得させて貰ひたいからぢや、ちやつと來て下され、昨夕から泣き通しで家内中が手を置いて居るわ』

『お察し申します、鹿の子は私も氣に縈つて居ります、今も今留守中の事を親父様にお願ひ申して居た處、直に參るのが當然ではございませうが、他に先生の御用もございます、逢へば談話も長くなります、それで今夜か――遲くも明日の朝參上、鹿の子納得の參るやうによく云ひ聞けも致す心、それまでを宜くお願ひ申します』

重輔は深く鹿の子を愛しぬ、されど彼女の何事にも執拗にして、容易に人の云ふ事に耳を貸す所なきに持て餘し居たりき、松陰より江戸行の事を命ぜられたる時、直に彼女に仔細を語りて、安堵もさせ歡ばせも爲んかと思ひしが、萬一恐ろしく執念き故障起りて、この芽出度き初旅に疵を附ける事ありては、此の身が出世の妨げともなるべく、延て先生の御名を傷けては爲るまじ、祝言の盃はせずとも妻たるに相違なき者、一度は事情を打明けんとは思ひながら、何と無く心の聽す

る如く覺もるも、從來鹿の子の爲に苦しめられたる記憶の存する爲ならん、今も逢へば逢はるゝを逃腰になりて、一寸免れの挨拶するを、德右衛門は強ても云はず、

『爾うか、それでは仕樣が無い、然し明日の朝は出發の用意もあらう、成るべくは今夜の中に喃、鹿の子は只こなたの來て下さるのを待て居るでの』

『先生の御用濟み次第參ります、私身に就き、少しも御心配下さるには及びませぬ』

『さらば屹と約束した、何なら迎ひに出やうかの』

『お迎ひは下さらずとも、鹿の子どのに不沙汰で出發するやうなことを致す筈ございませぬ』云ひ捨てゝ重輔は去りぬ。德右衛門は其の後姿の見えずなるまで見送りて、やがて家へ歸りたりき。

（七十九）

松陰は明日出發の事に就いて、重役に協議を要すべき事あり、辰刻より登城した

る後は、家族、親戚、門人等寄り集りて、旅の用意に忙しかりき、重輔は鹿の子の事も忘れたるが如く松陰の爲に用を辨じ、夕暮れ松陰が屋敷に歸るを待ち受けて、明日の手筈を取り極め、父も待ちてあるべし、親類の甲乙も來りてあらん、今宵はこれにて御暇申し上げる旨を斷り、久阪高杉その他の人々にも別れを告げて、やをら坐を起たんとするを、

『明日は丑の下刻當家へ參り呉るゝぢやよ、殿樣御出發寅の刻の御定めぢやに由つて、それまでには登城致し居らねばならぬ』

丑の下刻は尙暗かるべし重輔は謹んで承知の旨を答へて後、

『さらば御機嫌よくござりませ、私も家へ歸りて、親共と別れの盃にても、取り交しまする』

『重左衛門にも好きに申せ、此の度は多用につき對面せぬ』

『何れ明朝は國境までお見送り致すでござりまする、皆樣御免下さりませ』

眞に重輔は見違へるほどになりき、親の詞は聽かず、親類の意見は用ひず、まだ肩揚のある頃より酒を被り、色に溺れて、內を外に狂ひ廻り居たる時とは、身體の備へさへも正しくなりて、嘗さへ美しき姿の一人人目に注く程となりつ短き袴に兩刀横へて、玄關前の垣の間を過らんとする時、

『重輔、ちよと待てたもれ』と慌しく呼び掛けて、後より驅け來るはお千代なり雪よりも白き顏に莞爾と笑を含みて、片手に紙包を携へ居たり。

『お嬢樣でござりまするか、さて天氣都合も好く、お芽出度いことでござります』

『明日は愈出發するぢやの』

『お蔭樣で私も一人前の人間となるべき嬉しい初旅に上ります、只氣に繫るは敏三郎樣の事でござりまするが、只今では大分に字數も御記憶、少しは辨へもお爲きなされてござります、あなた樣御丹誠で、此の上御敎導ござりましたら、遠からず、御本の一冊もお讀み遊ばすことが得きやうかと心得ます』

『これと云ふもお前の誠が屆いたのぢや、敏三郎に代つて、私が禮を云ひます』

とお千代は改めて頭を下げて『今度はお前も芽出度い首途、何か餞別をと思ふたが、是といふ思ひ附きもない、其處で眞の記念までに……私と敏三郎とが二人前の包み物ぢや、どうぞ受けてたもれいの』と手に携へたるを差し出しぬ。

『何かは存じませぬが、滅相も無いことお云ひなされませ、斯樣な物を頂戴致さうと思つて敏三郎樣のお世話を致したのではござりませぬ、是は平に……』

『いえ〳〵左程に禮を云うて下さるほどの物ではない眞の志――餞別の記念までに上げるのぢや、何かの補足にして下され』

『何かは存じませぬが』と重輔は押し載いて『お心に掛けさせられて有難う存じまする、御辭退申し上げるが眞實ではござりませうが、切角のお志御餞別に下さるをお返し致すも失禮、是はこのまゝ頂戴致します』

『云ふまでも無いが、道中に氣を附けてな、寅次郎樣の事もよう賴んで置きますぞ』

『命に替へても御奉公申し上げる心で居ります』と重輔は裡に一分金二三顆も包みあるべきを懷に入れて、お千代には厚く暇乞ひ、足早やに門を出づる時は五日の月咲き亂れし櫻の枝にかゝりて、まだ早夜ながら屋敷町は淋しく、歸雁の聲高く聞こゆ。

折柄ばた〳〵と音して門に續く塀の蔭より驅け出せし者あり、白き物の目に閃めきしのみ、男か女か、定かに知れず重輔はハッと歩を止めて不審氣に際し見たり。

（八十）

五日月の影は淡し、櫻の花は雲の如くに曇る、重輔は暫く門前に佇みて、その歩音の遠くに消え去るを聞き送りしが、男女の差別さへ着かぬほどの事、況してその誰なるかを知らん要なし、心の中には不審しながら、引き返して松陰の耳に入れるべき事にもあらねば、急いで同心屋敷の家に歸りぬ、重左衛門は淋しく照る燈火の下に、我が子の歸りを待ち居たり。

『お父樣只今歸りました』

次の室に手を突くを嬉しげに見て、

『大さう遲くなつた、杉樣のお屋敷もさぞ、御混雜であらうと察しる』

『然しお手が澤山ございます、明日御出發の御用意も十分に調うて、漸うお暇を戴いて歸りました』

『恰ど今佩刀を研いで參つた處ぢや、重代の橘國照改めてお身へ讓る』
天照皇大神宮を祀れる床の刀架に、架けありし一刀を取り上げて重輔の前へ出す、身分こそ卑けれ、系圖正しき金子家の重代、此の中に代々の魂は籠る、この中に武士の膽力は磨るゝ。
『有難う頂戴致します』と重輔は恭しく受けて、其の儘側に置かんとするを、
『まづ見やれ、新刀なれど國照に優れた上手ぢや、殊にこれは大鈍子小亂の術物手に冴えあれば鐵でも截れる』
燈火は煌々として照る、春の夜はやゝ更けんとして、戸に當る落花の風、淋しく心を繞る中、重輔は鞘を拂うて見る、燒刀の匂ひ膽を照らして寒く、尖頭より露も滴り落つべき樣なり、重輔はつく〴〵と見て、
『思ふに增して美事な物でございます、御代代のお心はこの中に籠められてございませう、謹んで頂戴致しまする』
『大切に致せ、身にも替へ難い寶ぢや』
『心得てございます』と云ひながら鞘に收めて、再び恭しく押戴く。

『處で、そなたまだ德右衛門の處へ參らぬさうぢや』
『先生の御用方着きませぬので、まだその暇がございませぬ』
『それはよくない、鹿の子も待つて居やうと存ずる、今の間にちよつと行つて參らぬか』
『急くことではございませぬ、明日の朝出掛けに立ち寄つても仔細はございませぬ』
『いや、左樣でない、他の時とは違ふ、江戸へ參れば二三年は歸ることもならぬ、假にも親子の契りある間、餘り義理を缺ぐのはよくない、殊に明日の朝は隨分早く御出發と申すでないか』
『丑の下刻には先生お屋敷まで參らねばなりませぬ』
『さすれば今宵の中に盡すだけの事を盡し置かねばならぬ、一走りに行て參れそなた歸るまでに酒の用意ども致し置く、初旅と思ふと何ういふものか案じらるゝ』
『もう何時でございませうな』

『まだ早い、今し方五時を打つたばかりぢやよ』と重左衛門は詞も輕く『大急ぎに行つて參れ、德右衛門さぞ待ち難ねて居やうと存ずる』重輔はそれにても進まぬやうに見えしが、遂に心を決めて、

『夫では直き歸つて參ります』

『序にその一刀を見せて參れ、德右衛門町人ながら少しは物を見る眼があらう』

重輔は彼の一刀を腰に佩びて、提燈も持たず家を出でぬ、母親は何事をか精神が知らするらしく、玄關まで送り出て、

『途中に氣を注けて行かつしやれよ、夜道は物騷でござるよ』

『母樣大丈夫でござります、私の手には御代々の魂がお附き添ひでござります』

月は早や西の山に傾きて風寒く、花雪の如く世間は森と靜まりき。

（八十一）

重輔が二三町も屋敷を離れし時、

『重樣々々』と聞き覺えある聲にて呼ぶ、曾ては何よりも懷しと思ひたる此の聲、曾ては此の聲の影の追ひて、花に狂ふ蝶の如く、心を上の天に走せたる身が、今は何の故とも知らず恐しげに感ずるなり、無慙にも情無く感ずるなり、以前には鶯の初音とも聞かれしが、今は狼の遠吼とも耳に響きつ、驚として立ち止る。髮振り亂し、顏の色蒼ざめたる鹿の子の悄れ姿は、結ひ繞らせし垣の蔭より現れぬ。五日の月は果敢無く照りて眼許の露の玉の如きを射る。

『あなた何處へお越しでござります』

『鹿の子か』と重輔は勉めて沈着いて『此からお前の家へ行かうと思ふ』

鹿の子は一間程も隔ちて力無く立ち止まりぬ。詞も姿も例の如には見えざりき

『私よりはお前こそ何處へ行く』

重輔は續いて斯く云ひたれど、鹿の子は一言も答へなかりき。

『用が無ければ一所に行かうではないか、お父樣に今夜をお約束申して置いた』

鹿の子は瞬きもせず重輔の顏を見詰めぬ。重輔はその視線を避けるやうに、あらぬ方へ眼を配りながら、

『夜も更くる、早う行かうの』

『あなた明日は早うお立ちで厶りまするか』と鹿の子は暫時して問ひ掛けぬ
『殿様お立ちは寅の刻と云ふが、私は丑の下刻から先生のお屋敷へ參らねばならぬ、この萩の城下に在るも、もう二時か三時ぢやよ』
『さぞお忙しうござりませう』
『何かと多用、それもそなお前の家も尋ねずに居たのぢやよ』
『是から何れへお行ででござります』
『今も云ふ、今夜は必ず參上、何かとお物語り申すやうに德右衛門殿と約束してある』と重輔は打解けて『お前まだ歸らぬか』
『それではあなた福壽屋へお行でなさるのでござりまするか』
『いかにも左樣、今が途中ぢや』
云ふ顏を沈と見て、鹿の子は泳ぐやうに身を進めたるが、
『あなたお門が違ひは致しませぬか』と云ひたる聲に毒氣あり。
『え』と重輔は聞き咎めて『異しいこと申すのう』
『お門違ひではござりませぬか、それをお尋ね申すのでござります』

『馬鹿を申せ、門違ひなど致す筈はない』と重輔は初めて鹿の子の常ならぬ樣に心附き『そなた何か思ひ違ひをして居るの』
『それは貴下の事でこざります、あなたの御樣子が平生の樣ではござりませぬ』
『はゝゝ、こりや異しい、そなた變なことばかり云ふ、前も今も心に些の變りないが者が、樣子に變りのあらう筈はない、やつぱり何うかして居るやうぢや、申すまではないが、乃公の江戸不在中は、そなたが萬事を引き受けて父上母樣への孝養、二には御先祖代々のお墓守、皆此方が致し呉れねばならぬ、それを出發の今となつて、思ひ違ひなど致し呉れては、拙者殆ど立つ瀬がない、さゝ左樣な事を申さず、伴れ立つて參つてくれ、お父樣さぞお待ち難ねであらうと存ずる』
『いえ私、それを申し上げて居るのではござりませぬ、あなた是から福壽屋へお出でといふ、もしお門違ひではござりませぬか』
『又左樣な事――そなたにも困るでないか』と重輔は手を取て『さ、參らう』
『いえ』と鹿の子は振り放して『私は參りませぬ私はあなたにお聞き申すことがござります』

鹿の子の面上には嫉妬の影が颯と閃めく、重輔は覺えず後へ退りたりき。

（八十二）

『重様、あなたも兩刀佩したお武家様ではござりませぬか、お武家様は二心を抱くを此の上もない恥辱となされます』と鹿の子は慄ふ聲にて云ひしが、燃ゆるが如き嫉妬を唇に嚙みながら『ようも〳〵私を盲目にして下されたな』

『これ何を云ふ』と重輔は抑へる様に『私が何日二心を抱いた、詰らぬことをいふと怨さぬぞよ』

『あの立派さうなお口わいの、私も目が二つござります、何日までも〳〵あなたの口車には乗りませぬ、あなた此の間何んとお云ひなされました、お千代様は松陰先生のお妹、敏様の事に就いて、折々お目には掛るけれど、猥な事のある筈は決して無いと……』

鹿の子の聲は梢の風に搖ぐ如く慄ひて聞えぬ、彼女の爲には屢次苦しき境界にも落ち、屢次恐しき嫉妬にも遭ひたれど、今日の如く物凄き聲を聞きたる事無し

重輔は思はずも一歩退りぬ、一歩退りて佶と鹿の子の顏を見詰めぬ、鹿の子の兩眼に漲る涙は櫻の花の影を宿して紅かりき、紅き涙の傳ふ頰は淡き月に映りて蒼かりき、重輔は恐ろしと思ふよりも憎く感じぬ、可愛きと思ふ念は消えて、憎く忌はしと思ふ心雲の如く浮びぬ。

その雲は眞の一抹の微さき影が、胸の底に浮びたるのみなりしも、やがて全身に廣がり行くべき樣見えぬ、可愛く思ふ眼に花と映りし姿も憎しと感ずる眼に鬼と見ゆる習ひ、重輔は例になく鋭き聲して、

『えゝ慮外な、お身達の知つたことではない、假しお千代様に詞交さうとも、それは私の勝手ぢや、お前の差圖は弗と受けぬ』

『おゝ〳〵』と鹿の子は美しき唇に吼る如き聲を漏らして『あなたの御勝手ぢやと……私の知たことでは無いと……ようお云ひなされました、ようも今日まで私を玩弄物にして下さりました、久阪樣お詞添へで、あなたお江戸からお歸り遊ばすまで、沈と辛抱するやうにお約束申した事も、もう今日限りでございます、私は親と親との許した夫婦間でござります、禽や獸の樣に猥な戀に泣の

ではござりませぬ、あなたが其のお心なら、私にも覺悟ございます、私は是から吉田先生お屋敷へ參つて、久阪樣お目に掛ります、先生のお目に掛ります、お目に掛つて有樣を申し上げます、私何も知らぬとお思ひ遊ばすか存じませぬが、お千代樣とのお間も知つて居ります、今日の夕暮れ、杉樣のお庭の外でお千代樣からお手紙をお受けなされた事も知つて居ります、お千代樣と睦まじうお話し遊ばして在らせられたことも、私はちやんと見て居るのでございます』

これにて知る、今宵杉家を辭じ去らんとする時、その門口より慌しき歩音させて逃げ去りし黑き影は、この鹿の子にてありしことを、戀の爲に心亂れ、嫉妬の爲に常の識を失ひて、我が後を追ひ歩き、附け廻りて、さほどにもない事を黑き眼鏡掛けたる眼に見、我と我心に嫉妬の焰燃やすにてありしが、その心は憐れなれど其の所爲は憎むべし、然も自分の心の癖みより、水の如く清きお千代樣までを疑ひ有らぬことを口走り、それを吉田先生の御耳に入れんと云ふは、如何にしても恕し難き事なり、いかにしても捨て置き難き事なり、此方より强く云ふ時は、何處までも反抗して猛り狂ふが常、斯る女に掛り合ひしは我が過失、我が不品行の天罰今は何と云ふとも詮無し、詞を巧に云ひ欺きて、兎も角此の場を返し遣る外あるまじと思ひたれば、重輔は絞り出したるが如く笑ひて、つか〳〵と進み寄り、

『お前何故そのやうな言云うてくれる、永の年月私の心を知りながら、まだ疑うて居るのぢやの』

（八十三）

『私は何も彼も知て居ります、もう〳〵あなたのお口には乘りませぬ、是から先生のお屋敷へ參ります、人に怨みがあるものか、よう覺えてお在でなされませ』

鹿の子は斯く云ひ捨てゝ、足早やに去らんとしぬ、萬一鹿の子の口より有らぬ事共、松陰先生の御耳に入る事あらば、重輔の身は破滅せん、重輔一代の運命はこゝに空しく埋もれ果てん、高が一婦人の關係、此のまゝに振り捨て去らば其までながら、後の累ひに顧みる所なき事能はじ、蟻は微さき蟲なれど時としては十里の長堤を頽す力あり、鹿の子は取るに足らぬ婦人なれど、其の口は我が身の上の根

本より覆へすことなしとも云はれじ、大事の前の小事、江戸御供の協ふまで信用を廣むるには幾多の困難を經、幾多の熱血も絞りたり、さるに今鹿の子の心を取り止め得ずして、この小さき事より破綻を招かば、百日の説法も水の泡とならんと漸うに心を鎮めて、

『お前のやうに爾う云ふ者ではない、互に二世の末までを約束した間ではないか、殊さら芽出度い首途、お前の心に入らぬことも數々あらうが、今夜の處は私に免じて恕してくれ、その代り江戸滯留の間は、年來好きな酒も斷つ、女には關係も着けぬ、この詞を僞言と思はゞ、どんな誓紙でも書いて見せる』

『いえ、僞言でございます、もう〳〵お前樣の口車には乘りませぬ、私はもう……』と口惜しげに袂を嚙んで『覺悟して居りまする』

『すれば何うしたら氣が澄むのぢや』

『お千代樣に物を云うて下さりますな』

『はゝ、何かと思へば思ひ掛けぬことを云ふの、今も云ふお千代樣は先生のお妹御、敏樣の事について二三度詞も交したれど、第一は身分が違ふ、江戸出發のお暇乞ひは果す、此の上に用は無い、今の頼み易い事、假しこの口が腐れてもお千代樣に物は云はぬわ』

『必然でございまするな』

『勿論の事、武士に二言あると思ふか』と重輔は詞を續けて『これで心が解けたかの』

『まだでございます、私まだお願ひがございます』

『願ひとは、何事ぢや』

『私の願ひ』と鹿の子は唇を嚙むやうにして『江戸へ行て下さりまするな』

『や、何んといふ』

『私お前樣にお別れ申すのは嫌でございます、どうあつてもお側に居たいのでございます』と鹿の子は涙瀧の如し。

『何事かと思へば子供同然の詞、此の度の江戸旅行、物見遊山に參るのではない先日も久阪樣同道、そなた父御に云ふた通り、何處までも先生樣お袖に縋つて一人前の武士となり、この身に錦を着飾つて、芽出度く祝言の盃をすると……』

『私は嫌でございます、私は出世願ふ心ございませぬ、いかな山奥でも厭ふ處はない、あなたと一つ軒塲の月を樂しう見れば、本望でございます、私不憫と思し召すお心あらば、江戸御出發御延引なされて下さりませ』

『又しても左樣な事』と重輔は再び眼をぎろりとさせて『聞き分のないにも程がある、お前何日やらの約束を忘れたな』

『忘れは致しませぬ、それが恊はずば私を江戸へお伴れなされて下されませ』

（八十四）

『やア』と重輔は怒り聲『爲らぬ〳〵、左樣な事決してならぬ』

『これほどにお願ひ申すを、お聞き入れ遊ばさぬは、やつぱり私をお捨てなさるお心でございまするな』と鹿の子の顏の上には物凄き色さつと漲る。

『聞きたいにも是は聞かれぬ、そなたも重輔の妻では無いか、妻は内を助けるが役、良人を苦しめるが能では無い、好い加減にして置かぬか』と叱り附けるやうに云ふ。

『夫をお聞きなされぬは、お千代樣に御未練がおありなさるのでございます』

『これ滅相もない、左樣な大きい聲は致さぬものぢや』

鹿の子は嫉妬の爲に前後の考へもあらざりき、唯重輔を可愛しとのみ見る眼には、世間の義理も、物の道理も見分くべき餘裕とてはあらざりき、女の手にせる花を奪はんとする者は、その花の揉み碎かるゝを覺悟せねはならず、執着深き女は花を愛するあまり、そを人手に移すを惜しみ、到底我が手に力及ばずと思ひ決むる時は、我れも有たず、他にも持たせまじき心より、さしもの花を寸々に引き裂くが習ひなり、鹿の子は命に懸けて重輔を愛し居る、然ももし他人の爲にその愛を奪はるゝことあらば、可愛き重輔の心臓を刺すべき恐しき擧を爲し居たるかも知れじ、彼女は正しく自暴自棄なり、彼女は正しく半狂亂なり。

『大きい聲して惡いのでございまするか、聲の大きい位をさほどにお厭ひ遊ばすお前樣、ようも〳〵人の肝に綱附けて、皮の外へ引き出すやうの事なされましたな、私の願ひお聞き屆けない中は、もツと大きい聲を出します、松陰先生はおろか、お殿樣のお耳を貫くほどに大きい聲を出します』

『えゝ情無い、そなた氣が狂ふたな』

『氣も狂ひます亂心も致します、天にも地にも掛け替へのない大事の良人を奪られるのでございます、此の儘では居られませぬ、私の一念でも、お前樣を江戸へ遣ることは致しませぬ』と鹿の子は唇を反らして云ふ、眉は逆立ちぬ、眼は吊り上りぬ、次第に西の方へ淡れ行く月の光りは、櫻の花蔭より小さい顏を出して、斜めに妬婦の面を射る。

重輔はぴり〳〵と口の側の慄ふを覺えぬ佩刀の柄に掛けたる腕のわな〳〵と戰くを感じぬ橘國照の一刀は遽に在り、出世の行途を遮る者は何物をも恕されじ、鹿の子斯くてある間はそなたの身の立つ瀬無からんとは、兼て久阪樣より注告されし詞なり、忌はしき情の緒を切るにあらずば、一人前の男ともなられじ、鹿の子を一刀に兩斷せよとは、曾て久阪樣の仰せなされしお詞なり。

今にして思ひ知る、鹿の子は出世の妨けなり、鹿の子は我が心を腐らせ行く夏の風なり、彼の耳には我が熱き血を籠めたる詞も聞かれじ、彼の目には我が誠に光る眼の中も見えじ、理非の辨へもなく、正邪の差別もなく、只我意をのみ通さんとする妬婦の手は遂に我が運命を黑闇の中に引き入れん、遂に我をして路頭に迷はするに至らん。

憎き奴かな、恐ろしき奴かな、夫婦の情愛もこれまでよ、只一刀に切て捨てゝ、久阪樣の御前に首級を捧げ、我はお上の御處置を待たん、先生の大恩に背き奉るは恐れ多けれど、斯る者に關係ひて行く〳〵先生の御名を穢すことあらば、辯解なし今は此までよ、今は早や此れまでよ。

橘國照の佩刀に手を掛けたるまゝ、じり〳〵と進み寄る。

（八十五）

折から子の刻の鐘は鳴る、月は名殘なく姿を沒して、淡き明り花の上にのみ殘るは聲を機ませ『これから先生のお宅へ參ります』

『もう〳〵あなたの御本心は分りました、私に未練はございませぬ』と鹿の子宛ら中有を行くが如く足を返しぬ、重輔の怒氣は潮の如く押寄せ來る。

『鹿の子待て』と甲高き聲

『えゝ何でござりまする』

『そなた命は貰ふた』

云ふ聲の下に一條の白電は空に閃く、家重代國照の一刀は思ひ掛けもなく仇を斬る料となりき、鹿の子はばた〳〵と驅け出して、

『人殺し〳〵』と聲を限りに呼ぶ。

今は是れまでよ、萬々一何者かに引き止めらるる事あらば、恥辱の上の恥辱、世の胡盧となりて止まん、一旦鞘を拂ひたる太刀、此の分には納まらじ、重輔の顏は殺氣に滿つ、振り上げたる太刀の燒刃には、星影きら〳〵映りて、物凄きこと云ふばかりも無し。

『逃げうとて、うぬ、逃げうとて……』

『人殺し……人殺し……』

前には重輔の爲に捨つる命、敵れたる履を捨てるよりまだ易し、重輔の手に掛らば忽ち成佛得達せん、一思ひに切りたまへとて、皎々たる刄の下に身を投げ出したる鹿の子が、人間情愛の推移より不思議なるは無し、今は惡鬼に逐ひ驅けらるる如く恐れを抱きて、

『人殺しぢや〳〵、誰ぞ助けて下さりませ、もし人殺しでござります』と云ひながら驅け行く。その聲も引かぬ中に、

『うぬ、覺えたか』

甲高く迸しる聲、さつと閃めく刃、鹿の子の肩岬に紅き血煙、噴水の如く立ちしよと見る間もなく、

『あア人殺しぢや』

言葉も終らずばたりと倒れる、星は幾度か瞬きして力なき光をこの不幸の婦人の上に投げ、風は悲しげに梢に鳴て、落花ひら〳〵血汐の間に飜へる。

『人殺しぢや、ひ、ひ、人殺しぢや』

『恕せ、これもお身の執着が殺すのぢや』

重輔は刀を取り直して、鹿の子の上へ馬乘りに乘りたるが、

『思ひ知れ、よくも是までこの重輔を苦しめたな』

拜み打ちに胸板をぐさと突く、血汐は又さつと走る。鹿の子は息も絶え〳〵に、

『而してお千代様と戀をお遂げなさるのぢやな、この恨み、この口惜しさ……やがては〳〵』と云ふ聲も次第に弱りて、きつと白眼みたる眼の色凄じく、やがて息は絶え果てき。

『重輔の男は廢つた、明日御出發といふ今になつて町人の血に又を穢す、恐れ多い事ぢや、罪深いことぢや、もう先生のお目にはかゝれぬ』

重輔は悄々と起ち上りて、又の血を拭ふ中も、もし人の見咎めはせまじきかと、恐しげに四邊を見返る、腥さき風はこのあたり一面に漲りて凄氣次第に迫り來る。

重輔は逆上たる血の鎮るに附けて、後悔の念胸を衝きたれど詮ぞ無き、歩むともなく其處を去りて、我が家の側近く來りしが、垣の外より見れば扃を漏るゝ燈火の光り參差たり『あはれ父上、我を待てやおはすらん、不孝に不孝を重ねたる身の罪今は免るゝ處も無し、御目に掛りたきは山々なれど、斯くては累ひの後々に殘る恐れあり、怨させたまへ、只今より何處へなりとも身を避けて、時の來るのを待ちまする、父上母様これからお暇申しまする』

婦人は遂に身を切る斧なりき、重輔は自ら恩師に遠ざかる身となりつ、彼は雪の如くに散りかゝる落花の間に立ちて消ね難き悲みと悔とに泣きぬ、彼の前途は何とかなるべき。

吉田松陰　前編（終）

終